神と悪魔は人を見て嘲笑う

Zeke

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神と悪魔は人を見て嘲笑う

【Ｎコード】

Ｎ０６２７Ｈ

【作者名】

Ｚｅｋｅ

【あらすじ】

世界革新から新しい技術が生み出されていく。その内容が今回は物理的なものを逸脱していた。そこから生まれる混乱と人間と人間以上の能力を保有した行使者と呼ばれる人間。管理されていることに対して疑問すら持たなくなった行使者たち。その新しい便利な技術が世の中に広まっていき、それも普通になっていった時、行使者になった少年、優は突然、あなたは危険な存在であると告げられた…。

プロローグ（前書き）

専門用語的な内容が多いです。読み仮名の表現は状況によって違いますが、そういうものです…あしからず。

プロローグ

急速に発達した科学は魔法と区別がつかない…。

アーサー・C・クラーク

入学して一ヶ月あまりが過ぎた。

ブラックボードに派手なスーツと短いスカートを履いた秋雨京という二十代後半の担任教師がホワイトマーカーで文字を書き入れる。

S、A、B、Cと分類分けされたそれらを見て、生徒たちは呆然としていた。

それぞれの分類分けの後に名前が記入される。

「おいおい、不良がエリート入りしてるぜ」

後ろから小突かれて、左右違いの瞳を持つ男子生徒が目を丸くする。Bの後に記入された黒沢優だった。レモンイエローとサファイアブルーの特色ある瞳を持ち、特に特筆されるような目だった印象を受けない生徒だったが、素行がとりあえず悪い。奇異の視線を浴びせられている原因にもなっている瞳の色の違いは優をうんざりさせ、素行を悪くしていったという理由もなんとなく理解できないわけでもなかった。

人と違うことが優は嫌いだったからこそ、その分類分けにも納得できなかった。

「ってぇなコラ」

優は小突いた奴をに振り返って睨む。すると目つきの悪いがっしりとした体躯の生徒がニヤリ、と笑った。小突いた砂山悟は別段運動部だったりスポーツをしていたわけでもないが、高い運動能力とさっぱりしている性格の気のいい奴。優と悟は中学時代からの知り合いで、同じく進学してきた旧友でもあった。

「あれ、行使者（ユーザー）のクラス分けだよな」

「そうみたいだけど…俺は別にあいつみたいに特別じゃない」

優は応えながら、隣の席の女子を親指で指差した。
「桃花ちゃんね…確かにあの子は特別だ。カワイイし」
悟はそういうことを臆すこともなく言える。悟の言う、かわいいとは中学生以下にも見えなくない幼い顔立ちと大きめの瞳。すらりとした肢体で優しそうな笑顔の少女で、確かにかわいくないと言えば嘘になる。桃花はその容姿と保有している特定の行使術式や能力の高さから災害や事件などが発生すると教室から出て行っては、その日のニュースに名前と顔が紹介されるくらいの人物であった。
「優くん、同じクラスですよ。がんばりましょうね」
そんな優等生ですごい奴がどうして俺と一緒に行使術式の習得特別授業を受けなきゃならんのだ。
優はそう思っていると、悟がひょいひょいと桃花を指差す。
「え？あ、おう。がんばろうな」
話しかけられていたことに気付いて、優が慌てて応えると桃花は嬉しそうにうなずいた。
進学して一ヶ月、クラスメートの名前と顔がようやく一致し始めたこの時期に始まる新しい出来事…。それは放課後十七時から行われる、行使者と呼ばれる世界革新のきっかけにもなった行使術式（プログラム）に対しての専門教育を施す。まずはクラス分けが発表された。
ざわつく教室の中、SからCまでの後に二名ずつ名前が記入されている。クラスの人数は二十八人。その中から選ばれたのは八名だけだった。
「お前ら！静かにしろコラ！」
勝気な台詞と同時にブラックボードをばんばんと手の平で打ちつけ、豪快な音を鳴らす京。その様子や先輩の不良たちも一目置く存在である彼女は京の姐さんとも呼ばれている。
そんな彼女の声に従わない生徒は誰一人もおらず、教室がシン…と静まり返った。
肌の露出の多い赤のスーツに同じく脚線を美しく表現しているピシっと脚に絡まるようなスカートを着用している今年で二十六の彼

女は鋭い顔で教室を見回した。
　制服で言えば、男子である優たちは青と白を基調にしたブレザーとズボンで、女子はピンクと白を基調（ベース）としたブレザーとスカートを着用している。特に女子の制服は近隣の学生たちにかわいいと言われ、つい最近では何かの雑誌にも掲載されていたと聞く。
　国公立なんたらかんたら学園という長ったらしい名前のため、近隣や人々は学園とこの学校を呼び、その知名度は桃花の知名度と共に知られていた。
「聞け！Ｓクラス二名は明日から二年のＣと合流しろ。Ａ、Ｂ、Ｃは基礎から教導が始まる。いいか？」
　じっと優は睨まれていて、顔を伏せる。
「なんで俺を見て言うんだ」
　優は呟くと、悟が後ろでうしし、と下品に笑っている声が聞こえた。
　素行の悪さ、という点で優の右に出るものはいない。学園の生活が始まってしばらくすると、優は朝のＨＲ（ホームルーム）にはいない、教室に顔を出したと思ったら昼過ぎ、と既にその素行は教職員誰もが耳にするならず者の印象を全員に与えていた。
　とは言うものの、全寮制のために朝早くになると『コスプレ幼女の目覚まし時計』に叩き起こされて、寮でフケ込もうなどとすればたちまち外に追い出される。その追い出し方も自衛隊や各国軍隊が使用するような行使術式（プログラム）を行使（ラン）してくるのだから、たまったものではない。
「明日十七時から始まるからな。Ｂクラスは私が担当だ。わかったか優！」
「あー、ソユコト」
　自分の担当が京の姐さんだから、より五月蝿く言われるのか…。
　優はどうしてずっと自分を見られていたのか知ると、気分が億劫になってくる。顔を伏せたままにして寝ているふりをしている優に桃花がおろおろしていた。

「聞いてるのか！」
「あーい」
怒鳴られて優は右手をひらひらとさせて見せた。
かったりぃ。
正直に言えば、なぜ十七時からそんなものにわざわざ出なければならないのか…。
アフターファイブと呼ばれる特別講習があることは聞いてはいたものの、行使術式（プログラム）をまともに使えない自分に白羽の矢が飛んでくるとは思いもしなかった。
「センセー、何で緋村さんがBなんすか？」
優はふと気付いて、その気付いたことを口にする。
「基本とかそういうの、緋村さんなら必要ないと思いますけどー？」
優の質問に京はにやり、と嫌な笑みを浮かべる。誰もが思っていることだった。行使術式（プログラム）を使うために、宝具（ディスク）を使用するのだが優はそれができない。アフターファイブはそんな基本もできない奴を参加させるような補修項目ではない。それに比べて桃花は世界行使術式機構（ＷＰＯ）や日本魔法省（ＪＰＭ）にて階級認定（クラスアナライズ）を与えられた正式な行使者（ユーザー）でもある。基本、などとは既に無縁の地位にいた。
「お前が壊した宝具（ディスク）の数はいくつだ」
優は痛いところを突かれて顔をしかめる。それは重々承知している。
「そういや…前の実技でもぶっ壊して…」
悟が後ろで呟くのを優は聞き逃さなかった。それほど優は毎回、宝具（ディスク）を壊す。
宝具（ディスク）、とは一定の行使術式（プログラム）を入力しておき、それを行使術式（プログラム）を扱う行使者（ユーザー）が制御（コントロール）する。高度な宝具（ハイスペックディスク）になれば自立規律定義（スタンドアロンアルゴリズム）を持ち、持ち主の行使術式（プログラム）を起動（スタートアップ）する合図やさまざまな動作、呪文のような名称を入力すれば直ちにそれを行使（ラン）するものを与えられる。
優はそれに行使術式（プログラム）を入力（インプット）しようとすると、必ずといっていいほど破壊していた。

宝具(ディスク)は今や、生活のすべてに影響を与え、街を見れば自動車の原動力だったり、街灯に使用されている。世界革新(イノベーション)の中枢にあるのは行使術式(プログラム)と宝具(ディスク)で、街を見れば宝具(ディスク)がない景色はどこにも存在しない、と言われるまで至る所にそれが見受けられた。

バツの悪そうな顔をしている優に京は腕を組んで答える。

「お前のお守りだよ、桃花は」

「チッ」

優は舌打ちをすると、クラスメートの何人かがクスクスと小さな声で笑う。

「センセー、明日は風邪を引くのでやすみまーす」

優は適当にそう言うとカバンを引っ掴んで教室を出る。待て、何処に行く！と怒鳴り声が聞こえた気がしたが、性質の悪い幻聴(そらみみ)だと優は思ってそのまま歩を進めた。

テキトーにぶらつくか。

優は学園の外に出て駅周辺まで出ると、人がたくさんいた。

他の学生や生徒たちは優を見て、物珍しそうに指を刺したり、見られた。少なくとも宝具(ディスク)の扱いに慣れている、または行使者であるということは世界では一種のステータスになり、その特別新学校でもある優の制服は目立つ。さらに優が左右違いの瞳(オッドアイ)であればなお更、特別に見られても仕方ないことなのかもしれない。

優越感は何処にもなかった。むしろそんな人が嫌いでもあるし、目立ちたいとも思わなかった。

「よぉ、にいちゃん、それカラコン？」

いかにもガラの悪い連中に絡まれる。

「俺は今気分が良くないから、うざいんですよね」

優が挑発されているから同じように答えると、男は後ろに二人の男を引き連れていた。

そういえば悟は今日、バイトあるって言ってたな。

そのまま通り過ぎていく優はゲームセンターに悟を連れて行こうとする考えを断念する。

「てめぇ、シカトすんなコラ」
優は相手にするのも面倒で歩こうとすると、後ろから微かな行使術式の行使方向を感じて振り返った。
「行使術式を使えるのはお前だけじゃねぇんだ！でかいツラしやがって学園の生徒さんよ！」
男は拳を大降りに振ってくる。
「行使術式…炎！」
突き出された拳を優は後ろに上半身を逸らして回避する。男はケンカ慣れしている様子でそのまま左を同じように…炎で包んで優の横っ腹めがけて打ち出そうとする。
「ストップ…です」
突然、優と殴りかかってきた男の間に桃花が割り込んで、パシンと手を両手で押さえ込む。男は驚いて二歩ほど下がり、桃花は困ったように呟いた。
「行使術式は人を傷つけるためにあるものではありません」
諭すようににこりと微笑む桃花に男は悔しそうに桃花を睨む。
「チッ、女に助けられるなんてザマねぇぜ、カラコン野郎」
完全に桃花に押さえ込まれて男が吼える。負け犬の遠吠えは向こうだとわかっていても、優は頭にきた。
「行使術式、起動準備、対象固定…射撃」
優は桃花の背中に手の平を向けると、手の平に光が収束して放たれた。桃花を迂回するように放たれた弾丸は男たち三人に直撃して、男たちが動かなくなる。
宝具がなくても行使術式は使用できる。宝具はあくまで補助であり優には必要ないものだったが、それを扱うこと…行使術式を誰でも使えるようにするのが行使者の使命でもあるとしている規定では優は未熟者の烙印を押されている。
「優くぅん」
桃花が泣きそうな顔をして優を責める。傷つけるために行使術式があるわけではないという桃花の言動を思い切り否定する一撃では

あった。
「先にも言ったように、行使術式(プログラム)はですね…人を傷つけるためではなく…」
ピンと人差し指を空に向けて説教するように言い出す桃花を優は受け流して、桃花に背を向けて歩き出す。
「うわ、うわわ、置いて行かないでください！」
桃花が慌てるが、優は別に気にせず歩き出す。説教みたいなのはたくさんだった。
桃花が優の隣に追いつくと、優は一定のペースで歩くが、桃花は前に出たり後ろに下がったりしている。何となく優は歩速を緩めると桃花が隣を歩き始める。
ちっせぇ…。
別段、気にしていたわけでもないが桃花の頭がふわふわと見えるのを見下ろして優は素直にそう思った。
桃花は百五十程度の身長で、優は百七十を超える。何気なく気付いたが、テレビなどで写る桃花とはなんとなく印象が違って見える。
「桃ちゃん」
「何でしょう」
「行使術式(プログラム)はどうしてそう呼ばれるんだ？」
「基本術式は数式と今までの原則で組み上げられるからです。サー・アイザック・ニュートンの三原則である慣性の法則、運動方程式、作用反作用の法則などですね。まあ、それを逆転させて虚数値をとることもありますが、その三原則の反転も使いますし、それは逆ニュートンなんて呼ばれ方もしますが」
それらの原則はなんとなく頭に入っている。生まれる前から頭の中にあったような…。
学園には物理化学の科目は存在しない。それは全員が生まれつき知っているからであって、行使術式(プログラム)や法具(ディスク)の扱いに長けているものは全員そうだった。
「頭の中で展開した行使術式(プログラム)工程(プロセス)を精神情報網(ネットワーク)に通して意識層と無

意識層を循環させて戻って来た情報を処理、実行するのが行使者(ユーザー)なら、その事象を引き起こす引き金(トリガー)はどこにあるんだ？」
「さぁ、そもそも精神情報網なんて呼ばれ方をしているネットワークですら、私たちが発見したときには既にありましたからね。私たち、とは世界行使術式機構（ＷＰＯ）ですが…。精神学者のヴェリエッタ・アルクス・レーディンさんが行使術式(プログラム)を体系化させましたが…わかっていないことのほうが多いんですよ」
「宝具機能(ディスクファンクション)もヴェリエッタが考案したんだろ。精神情報網(ネットワーク)に行使者(ユーザー)が直接潜入(ダイレクトダイブ)しなくても、宝具(ディスク)を中継(ジョイント)として使用することで安全に早く処理できるようにした」
「正解です。ただし今は付加機能が多くて…特に行使術式(プログラム)を記録(レコード)できるようにしてからというものの、プロセッサというよりはディスク（記憶媒体）として使用することのほうが多くなって、宝具(ディスク)はディスク（記憶媒体）であるという認識に変わりました」
「それを俺は扱えないから、広義では俺は行使者(ユーザー)ではないって定義されるよな？」
優の質問に桃花は首をかしげる。
「本来、宝具(ディスク)は持っている行使方向(ランベクトル)を増加(インクルージュ)させたり短縮(ショート)起動させたりするのがメインで使われているんですが…そうですね…十のものを百にするようにセットされていて、限界値が百八十まで猶予を与えられて設定されているとしまして…」
桃花はうーんと悩む。
「階級(アナライズ)の与えられていない行使者(ユーザー)には発動制限(ランリミット)が世界中にかけられている封殺行使術式(リミットプログラム)によって制限されているんです。宝具(ディスク)はその封殺(シール)に対して逆関数をかけて発動させるためのものでもあってですね…優くんがいつも行使(ラン)する術式が百八十までしか耐えられない宝具(ディスク)に大して二百以上の過負荷をかけているのではないか？と言われているんです」
「つまり強力すぎるってことか？」
「はい、先ほどの三連分散の射撃(シュート)ですが、あれは普通のレベルの行使者(ユーザー)

使者が使うことは不可能です。ぱっと見た感じでは、装弾する際に三つ分を一つにまとめていましたから、まず射撃三発分の行使術式（プログラム）に必要な展開力が必要ですよね。そして高速化、制御、威力管理も三つ同時に行いました。つまり全ての制御に三倍必要な仕事量（タスク）ですから、合計で十二倍の行使術式（プログラム）を制御する力が必要だったんですよ。あれを見て確信しました」

桃花はにこりと笑う。

「私がやって来た理由は君がいたからです」

「行使術式（プログラム）なんて理論の塊を行使（ラン）するやつの台詞とは思えないな」

優は苦笑すると、桃花は首をかしげる。

ロマンチストってやつかな。

優は本屋を見つけるとそこに入る。

「じゃあな」

偶然居合わせて話をしたが、やっぱり頭の中身はすげぇ奴だ。

優は話の半分以上を理解できなかったので、世界行使術式機構（WUO）のエース、緋村桃花は別次元の人間だと再認識させられた。逆ニュートンだのそんなことは考えたこともないし、虚数を展開するだのどーのとかはさっぱり要領を得ない。

「あー、そうだ、さっきはサンキュな。ああいう連中に絡まれるのはしょっちゅうでよ。目の色が独特だから目立つんだろうな。まぁ何はともあれ、大丈夫だからよ」

優は手の平を振って少年誌のコーナーで立ち止まり、適当に本を取って読む。

桃花も本屋を見回して、目を輝かせたかと思うととてとてと本屋の中を歩き回っていた。

何だ、目的地は一緒だったのか。

優はそう思うと、雑誌に再び視線を落とす。

しばらくして違う雑誌に手をかけようとすると、ガラスに映った桃花が視界に入った。

よくよく目立つ奴だな…。

桃花は難しそうな本のコーナーで立ち止まって、ふんふんと首を縦に振ったり横にかしげたりして、左手で本を持ち、右手で天井を指差すと、そこに行使術式（プログラム）を起動（スタート）していた。本に書かれている行使術式（プログラム）を試しているのだろうが、正直目立つ。

世界人口に比べて行使者（ユーザー）は二割しか存在しないと言われており、行使者（ユーザー）そのものが特殊な生き物であるとも言われているのに、桃花は人前で普通に行使術式（プログラム）を展開しているのだから、目立つなと言うほうがムリだ。

店員さんに困ります、と注意を促されて桃花が慌ててぺこぺこと頭を下げている。彼女の人生はわからないが、とても行使術式（プログラム）を扱うことに慣れていて、生活の一部なのだろうと優は思うと雑誌に視線を落とす。

毎月なんとなく購入しているファッション雑誌を購入して、茶色い袋を持って外に出ると桃花も同じようにして本を胸の前で両手に抱えるようにして出てきた。

暇だな…新しいCDでもチェックするかなぁ。

優が歩き出す。

「…」

ひょこ、ひょこ、と桃花の頭が動くのが見える。さして気にすることでもないのだが、身長差で生じる歩く速度の違いで桃花が前に出たり下がったりするのだから、気にしないでおくほうがムリだった。

俺、尾行されてるのか？

優はCDショップに入ってしばらく物色していると、桃花も店の中をうろつき始める。

以外なパンクロックコーナーの視聴用ヘッドフォンをつけたりして、桃花は慌ててそれを元に戻したりしているのを見て、優は苦笑した。

しばらくすると数名の客が桃花を指差して桃花を取り囲む。

「緋村特A級行使者（エースクラスユーザー）ですよね？」

「うおすげぇ、ナマだ。ナマ桃花だ」
客たちが勝手に騒ぐのを尻目に、優はやはり有名人だな、と思った。
騒がしくなって来た店内から逃げるように優は外にでると、いつの間にかまた桃花が隣を歩いている。
「…」
コンビニに入って一周して出る、用もないのに大型電気店に入ってぐるぐると中を回って外に出る。食料品を売っているスーパーに入り、ドラッグストアで購入する気もないプロテインの五キロ缶の注意書きを読み、外に出る。
「おい、何か用なのか？」
たまらず優は桃花にたずねる。
「用事終わりました？」
相変わらず隣にいる桃花が首をかしげた。
「質問に質問で返すな。なんか用なのか？バツゲームで優を尾行しろとか、嫌がらせをしてやろうとか、そういうことなのか？」
「用事が終わってから時間がほしいんですよ」
質問に答えているのか、いないのか…。優はため息を吐いた。元より用事などないのだから、早く切り出してくれれば暇つぶし程度に話には付き合ってやれる。
「用事はない。何か用か？」
「そうなんですかー、じゃあですね」
「長いのは嫌いだぜ。落ち着きがない子で通ってるんでね」
優がにやりと笑うと桃花が困ったような顔をする。
長いんだな、話…。
適当にカマをかけてみたが、長い話ならドラッグストアの駐車場で立ち話もおかしな話だ。優の左右違いの瞳や知名度（オッドアイネームバリュー）のある桃花が立ち話すれば、通行人の注目を浴びることは間違いない。今も二人ほどの通行人が立ち止まって主に桃花を見て何か話をしている。
「お前は俺をぴったりマークしてたよな。振り切ろうとしたのに」

「なんで振り切るんですか」
桃花は不満そうに頬を膨らませる。
いや、無言で隣をずっと歩かれたら撒くだろ普通。
優はあえて口にしないでおくことにする。どうにも常識が通用しないらしい。
「ハラ減ったから、とりあえず何か食うか」
「え？おなかすいたんですか？」
「成長期でね」
優がゆっくりと歩き出すと、桃花が付いて来る。
「まだ用事あったんですか…」
まだ歩くのかと、うんざりしたように言われて優は苦笑する。
「お前に付き合う用事があるんだよ」
「なるほど」
桃花は嬉しそうに微笑む。
バーガーショップに入って二人が列に並ぶ。
「こういうお店、始めて入りました」
「へぇ、珍しいな。俺なんて土日はコレだな」
「はぁ…ジャンキーフードでしたっけ」
「ジャンクだジャンク」
狙っているのか、天然なのか、行使術式（プログラム）以外にはまったく興味がないような発言に優が失笑する。
「何か食うか？さっき助けてくれたわけだし、一応礼だ」
「え、飲み物だけでいいですよ。歩き回って喉が渇いちゃいました」
そりゃ悪うござんしたね…。
優は自分の分と一緒にウーロン茶を頼んで、スキャナの上に手を置いて商品と交換する。
「こんなところまで自動化されているんですねー」
桃花はきょろきょろと周囲を見回している。
「そうだなー、そうみたいだなー」
優はいちいち取り合っていると疲れそうなので適当に相槌を打ち

つつ、二回にトレーをもって二人席にトレーを置く。向かい合うようにして座ると桃花にカップを渡す。
「ありがとうです」
ストローに口をつける桃花を見て、優は苦笑した。
「とらねぇからよ…」
両手で大事そうにカップを抱えて飲む桃花は首をかしげる。そういうつもりではないらしいが、優は何となく小さな桃花に対してLサイズの大きいものを買い与えたのだ。何ともいえないギャップがある。この店の殺人的な大型…キングLは桃花の顔ほどの大きさがある。二リットルだか三リットルだか内容量があるはずだった。
「で？なんの話だ」
「明日からアフターファイブです」
「知ってるよ」
どうでもいい内容だったので、一気に話をする気もなくなる。
「知らなかったかと思いました」
ホンキで言ってるらしいな。
桃花は驚いたように呟く。
それがなんだか遠まわしに喧嘩を売られているような気がした。つい先ほど、学園で京に言われたばかりなのに、忘れるわけがない。そして優は忘れていると思われていたらしい。
「それで購入するというか、準備しなければなりません」
まだ要領を得ないので優は口を閉ざして耳を傾ける。
「宝具（ディスク）を個別に準備しなければならないのですけれども…先ほど見て確信しました。優くんは普通の宝具（ディスク）じゃだめなんですよ。壊しちゃうと思うので」
優は今まで壊した宝具（ディスク）の数を思い浮かべて、うんざりした。一つ十万円以上の宝具（ディスク）を二十個以上は壊している。学園の備品でなければ首を吊っていたかもしれない…。
項垂れている優を見て、桃花が苦笑した。
「しょうがないですよ、優くんは特別です」

「は？」
「いえ、別に。とりあえずですね、基礎段階では空の宝具（ブランクディスク）に行使術（プログ）式（ラム）を入力する作業の高速化（スピードアップ）とか、入っている行使術式（プログラム）の解析（アナライズ）とかもやると思うんですね。できるだけ大容量の宝具（ディスク）がいるんです」
「待て待て、俺はアフターファイブはフケるから別に準備しなくてもいいぜ」
説明してくれて何だけど、悪いね。
優はそう思いつつもその話は無駄だよ、と言外に伝えると、桃花が悲しそうな顔をする。
「お父さんとお母さんが草葉の影で泣いてますよ」
「勝手に殺すなよ。二人とも生きてる…」
桃花はきょとん、とする。
「じゃあおじいちゃんとおばあちゃんで」
にこりと微笑まれて、優は盛大にため息を吐いた。
「そんなに俺を出席させたいのか？」
「ええ、してもらわないと困ります」
「なんで」
「秘密です」
「どうして」
「えっちです」
「ぐあ」
女の子に上目遣いでそんなことを言われては何も言えなくなる。
優等種族は劣等な種族の面倒を見るクセがあると聞いたが、これもそうなのか…。
いやまて、それじゃあ俺は哀願動物クラスだと思われているのか…それはいやだな…。
「で、ですね。優くんは大容量かつ高速処理可能な宝具（ディスク）でないとたぶんダメなんです。入出力の処理速度が速くないと…ボン！」
桃花が右手を天井に向けると、ぼんっ！と炎が小爆発した。
「わかりやすいんだが、行使術式（プログラム）をむやみに使うな」

そこらじゅうででトレーやモノを落とす音が聞こえてくる。
「まぁそれでですね…私の昔使っていた宝具（ディスク）を貸してあげようと思うんです。先ほど調整が仕上がったと連絡がありまして」
「準備が早いな。拒否権は？」
「いいですよ。拒否権はあなたが生きることを拒否したとみなします」
ぼんっ！
優のオレンジジュースの入ったカップが爆発して、中身が蒸発した。
「危険等級トリプルＡ、黒沢優が本官の指示に従わない場合、その抹殺及び消去を一任する。これは正式な日本魔法省（ＪＰＭ）の見解であり、私は承諾しました」
「…はい？」
降って沸いたような話に優は自分の耳を疑った。
「観測された事実である以上、それは否定する余地のない事象。黒沢優、あなたは最上級危険因子です」
指を指されて優は目を丸くする。桃花は笑顔のまま答えた。
「もっとも君が、本当に悪い奴だったら良かったと思います」

一章　一節　平和と戦場と少女

「もっとも君が、本当に悪い奴だったら良かったと思います」
桃花はすっと息を吸い込む。
脅しではない、力の本流を感じる。
「行使術式（プログラム）、起動準備（スタンバイレディ）」
桃花が椅子を後ろに蹴っ飛ばしながら立ち上がり、距離をとる。
優も反射的に立ち上がる。
「行使術式（プログラム）、起動準備（スタンバイレディ）！」
「貫通掃射（スィープ）（ガンフェイア！）！」
桃花のほうが早かった。起動準備工程（スタンバイプロセス）から発動工程（アウトプットプロセス）までが確実に早い。並列化（パラレル）と高速化（スピードアップ）の理論（ロジック）が優よりも数段上。特Ａ級（エースクラス）と呼ばれる行使者（ユーザー）だけあって、いくつもの螺旋光粒子熱線（ツインスパイラルレーザー）が優に向かって発射される。
「防御壁（プロテクト）（プロテクト！）！！」
優が自分の周囲三百六十度全てに光の面で出来た壁を作る。
大気が落雷で裂かれるかのような轟音と同時に衝突。ぶつかったエネルギーが熱エネルギーに置換されていく。客たちは慌てて外に非難していく。
「冷却しないと焼けちゃいますね。ふふ、優くんの丸焼けを持っていけば任務完了（ミッションコンプリート）ですか、えぐい仕事になりそうです」
桃花は右手を優に向けたまま、さらに出力を上げる。
「く…そ」
二重起動（ダブルセット）した防御壁（プロテクト）のおかげで一枚目と二枚目の壁の間に空間ができているため、熱風に晒される事はないが、それも時間の問題。
行使者（ユーザー）は頭の中でいくつものことを同時に思考するクセが自然と出来上がる。
桃花の表情と言っていることの違いはそれが元だとするならば、納得できた。

「本当はいやなんですよね。だから降参してくれません？」
「アフターファイブに出席させるためにこんなことしてるのか？」
「そういうわけではないんですよ。まぁそういうことで」
優はぎり、と奥歯を噛んだ。
条件は同じ、桃花も優も宝具に頼らない型の直接行使可能な行使者。ただ桃花が一流で優が三流なのは目に見えていた。
宝具を使わない行使者は一流か三流にも満たない行使者のみである。
と誰かが言っていた気がする。
「早くしないと本当に黒焦げになっちゃいます…」
桃花が鳴きそうな顔をする。
だったらやめればいいのに…。
「起動…反射壁」
三重起動。
優は防壁と防壁の間に違う種類の壁を作る。
「解除」
一枚目の壁を取っ払うと、二枚目の反射壁に桃花の射撃が当たって反射、天井を突き破って空へ出て行く。
桃花は行使術式を解除すると、微笑んだ。
「正解です。防御壁は耐えれる限界強度以上のものや単発的なものなら防げますけれど、連続して当てられる今のような状況では意味を持ちません。現状維持はプラスに作用しませんし、私が別の行使術式を行使した時点でそちらの壁は崩れていたでしょう」
「そうしない理由は？」
「圧倒的力量差を理解できないほど愚鈍な人間ならば、いつでも殺せます」
はっきりと断言する。
それほど、優と桃花の間にある差は大きいのだと。
「私はどうしてあなたが戦闘行使術式を覚えていて、なおかつ高速起動する工程短縮まで覚えているのかは問いませんが…それが人を

傷つけるためだけに覚えたものであったとしたら、私はあなたを赦しません」
桃花が射撃(シュート)を解除(リリース)した瞬間から、優はずっと後ろに向かって話しかけていた。首筋に当たる、冷たい切っ先を感じながら。
「正式な授業を受けて、正しい方向でよりいい行使者(ユーザー)になってもらいたいのです」
「お前のように…？」
「いえ…そう…ですね。黒沢優、あなたを私の保護観察の元に置きます。よろしいですか？」
今度こそ拒否権はなかった。
行使者(ユーザー)は行使者(ユーザー)によって殺されても文句は言えない。それがある種のルールでもある。
おそらく拒否すれば、当てられている冷たいものは自分の奥にまでそれを差し込まれるであろうという実感があった。
優は両手を挙げて降参する。
「逃げますか」
「だな」
優と桃花は破壊したバーガーショップから一目散に逃げ出す。
「優くん、明日、学園で私の宝具(ディスク)を貸してあげるので、それを使ってください」
「あいよー」
優は適当に返事をする。
たぶん、嫌がっても無駄だろうし、何気に桃花は融通が利かない上に周りが見えない。というより結果をあまり重視しない傾向にあることを何となく理解できた気がする。

桃花と分かれてから寮に戻り、優は何の気なしに購入した雑誌をめくった。
「…おーおー、かわいそうに」

モデルの頭の部分が焦げている。他のページも焦げたりなくなっていたりした。
ドアベルが鳴らされて優はインターフォンモニターを覗くと、疲れ果てたような顔をしている悟が写っている。
「新聞はいりません」
「何時俺が新聞屋のバイトを始めたとお前に話したよ」
不機嫌そうに言われて優はドアロックを解除すると、悟が部屋に入ってくる。
「相変わらずすげぇ部屋だな」
ベッドと作業台にさまざまな武器が壁にかけられている優の部屋は一見、武器庫のようにしか見えない。点検油の匂いや道具が作業台の上に転がっていた。
「お前の部屋も同じようなもんだろ。宝具球（ディスクデバイス）がごろごろと」
「だなぁ」
悟は反論できない、とテーブルの上に紙袋を置いた。
「桃花ちゃんとさっき会って、これから任務だから先にこれを渡しておきたいって頼まれた」
優はテーブルの上におかれた紙袋をひっくり返すと、真っ赤な球（ルーン）体（デバイス）が転がり落ちる。
「うぉっ！」
優は慌ててそれをキャッチして安堵の息を洩らした。
「宝具（ディスク）だな。うちの店で調整してたんだけどそいつ、かなり高機能型みたいだぜ」
「桃花が前に使ってた奴だからなぁ…あのとんでもねぇ娘のだ」
二人は桃花が前に使っていたのだから、それもしょうがないと苦笑する。
「桃花ちゃんは…これに出かけた」
悟は壁面液晶テレビのリモコンを手にすると、スイッチを入れる。
どこかとどこかの国の戦争だった。
何度も街にミサイルが着弾している様子が放送されて、街が燃え

ている。
そんなに珍しくない、戦争の映像。
「これが何だよ」
「難民保護のために日本自衛隊が出向してるだろ？陸上部隊は撤退したけどな」
悟に言われて優はそうなのか、と呟く。
「制空権が怪しくなってきたから、海から出るつもりらしいぜ。イージス二艦に収容したのはいいんだけど、そこもなんだか怪しいらしくてね。桃花ちゃんが護衛で行くことになって、さっき空間転送局（テレポーイント）に向かっていった」
なんとも出鱈目な話ではないか。
空間転送（テレポート）できるのは行使者（ユーザー）とそれに追従する装備品のみで、しかも転送局（テレポーイント）間だけという。
もっとどうにか出来ていれば、桃花が出撃する必要もないのではないか？と思うがそれも杞憂だった。
「すげぇよな…あんなミサイルの雨の中に飛び込むようなものだぜ」
悟の感想もわからなくない。自分だったら絶対に嫌だ。あそこには濃密な死の臭いしかしない。
「危険な海域を抜けるまで約二日だってよ」
「そんな情報どこで仕入れるんだよ」
「桃花ちゃんが言ってた。だから何事もなければ二日で帰れるって」
「へぇ」
二日、二日間もあんな危険な状況に身をおくことなどできるのだろうか？
まともな精神ではいられないだろうなぁ。
優は別世界の話を聞いているような気がしてイマイチ実感が沸かなかった。
「明日、桃ちゃんとアフターファイブだったんだけど、なくなりそうだな」
面倒な監視者がいなくなって、優はほっとした。

「嬉しそうだな。俺だったらあんなかわいい子と一緒にいられるだけで舞い上がっちまうのに」
「どんな美人でも拳銃握ってこっちに銃口向けてにこにこされてる気分だろ…よほどの変態じゃねぇと喜べない状況だと思うが…」
優はため息を吐くと、なるほど、と悟はうなずく。
「でもよ、空の宝具（ブランクディスク）なんて一般じゃ出回ってないんだぜ。普通専属の行使術式（プログラム）が入力（インプット）された奴なら売ってる。飛翔（フライハイ）の行使術式（プログラム）だと利便性があるから使用制限にもよるけど、何十万って価格なんだ」
「へぇ…興味ねぇけど」
優がうんざりしたように呟くと、悟は首を横に振る。
「ばっかお前、お前に渡してくれって言われたこいつ、処理速度も容量も桁外れなんだよ。百万、二百万クラスの値段がつくのもおもちゃって言える位、高価なんだぞ」
「…ほぉ」
優は宝具（ディスク）を手の中でくるくると回す。
「そもそも空の宝具（ブランクディスク）は行使者（ユーザー）しか使用できないから数も少ないしな」
やけに詳しいと思うと、悟はそういう店でバイトしているので詳しいことを思い出す。
行使者（ユーザー）でもないのに宝具（ディスク）に詳しく、学園でも悟は修理屋（リペアラー）などとも呼ばれていたことを思い出した。
「お前、桃花ちゃんに期待されてるんじゃないのか？」
「殺されかけたけどな」
昼間の事件を思い出して優は顔をしかめる。
「殺したいほど愛してるとか…」
「狂った愛情だな」
優は苦笑すると悟はげらげらと笑う。
優は試しに起動（スタートアップ）してみようと学園の制服のポケットから黒いグローブを手にして、左手にはめる。そして手の甲の部分に宝具（ディスク）をセットすると、かちり、と音を立てて完全にセットされた。
「おはようございます、マスター」

「ぶふ」
突然話しかけられて悟が吹き出す。
「なんだこいつは」
「宝具(ディスク)です」
優に律儀に答える宝具(ディスク)に二人が気持ち悪そうな視線をそれに送った。
「なんだお前は」
同じ質問を繰り返す悟に宝具はしばらく黙り込む。
「私は桃花によって設定された自立思考型宝具(スタンドアロンディスク)であり、入力(インプット)されている行使術式(プログラム)を自動(オート)で展開(ラン)することを目的とされて製造されました」
「へぇ…」
優が興味なさそうに呟く。
「すげぇ…すげぇよ。まじすげぇ。喋ってる！話ができる！こいつはすげぇや」
なんだか舞い上がっている悟を見て、優は逆に冷静になれる気がした。
「気持ち悪いけど…」
優は窓を開ける。
「行使術式(プログラム)、入力(インプット)」
頭の中で行使術式(プログラム)の理論(ロジック)を展開させる。
「読み込み中(リーディング)…入力(インプット)を拒否します。射撃行使術式(シュートプログラム)は桃花によって入力済み（リザルト）です」
「んがっ」
優は肩を落とす。
「ただぶっ放すだけの行使術式(プログラム)だからなー、たぶんほとんどの行使(プロ)術式(グラム)は桃花ちゃんに入力(インプット)されてるだろうし、あの子の能力だと最適化と並列化はもうやることないと思うぜ？」
悟がにやにやと笑い、優の肩を叩く。
「久しぶりにアレ、やりますか？」
優の誘いに悟はちょっと待ってろ…と部屋を出て行く。

一章　二節　Moon Sniper

「久しぶりにアレ、やりますか？」
優の誘いに悟はちょっと待ってろ…と部屋を出て行く。
「おい宝具（ディスク）、ぶっ壊れんでくれよ」
「私を破壊することができるならば、大したものです」
ふてぶてしい野郎だ。と優は苦笑する。
「お前、宝具（ディスク）っていう感じがしないな。宝具（ディスク）って呼ぶよりなんか名前ないのか？」
「桃花は守護者（ガーディアン）と呼んでいましたが、私には個別認識名称は必要ありません」
「守護者（ガーディアン）…ね。俺もそう呼ぶかね」
「ご自由に」
優はやっぱりこいつはどっか面白そうな奴だ、と思うと右手で守（ガー）護者（ディアン）を軽く叩く。
「よろしくな、相棒（パートナー）」
「イエス、マスター」
ドアが開いて悟が入ってくる。
「相変わらず仰々しい格好だな」
優は中世騎士（ナイト）のような装備をしている悟を見て、唖然とする。メイルにグリーブ、手甲をつけていて、青基調の赤ポイントのような色調でデザインもそれなりにいいが、街の中は歩けまい…。
「俺、宝具（ディスク）は使えるけど行使者（ユーザー）じゃないからな」
悟は笑うと優が外に飛び出した。
「模擬戦闘（シミュレーションバトル）ですか？」
「そうだ。あいつは強いぞ。無駄に金持ちだからな」
「了解しました。模擬戦闘用（シミュレーションモード）に空間を封殺（シール）します」
「頼む」

守護者の設定したフィールドに優と悟が飛び込む。
「うおー、すげぇ密度の封殺結界だ」
悟が驚くのも無理はない。風も音も全て遮断された空間のようで、耳鳴りがするほど静かな空間。
この中では通信も一切できないだろうし、外から入ることも不可能なはずだ。
外から入れなくて、中からも影響は与えられない。
「桃ちゃんの結界？」
「理論展開は桃花ですが、不要分の行使術式は簡略化しています」
自立思考は恐ろしいな、と優は心の中で思う。
「で、今日のルールは？」
悟が剣の宝具を展開して、付属装備を展開すると剣の色が青色に変わる。高出力螺旋光熱線（レーザー収束方式）の剣だ。
「負けたほうが明日の昼飯おごりとか？」
悟が尋ねると優がうんざりする。今まで勝てた試しがないのだ。
「いいけどよ。勝敗の決定方法をゆるくしてくれよな」
「冗談、行使者の言葉とは思えねぇな！」
優が一瞬にして悟との間合いを詰めると、悟の姿が消える。
短距離空間跳躍を連続して行う、宝具の（・）制御が非情に難しいとされる連続起動。機動力で言えばその状態の悟を捕まえるのは非情に困難で、目で追うことすらできない。
「くしょ！」
逃げ回る悟にいらいらして思わず声が出る。
真後ろ、横一閃に放たれる剣を優が屈んで頭上をやり過ごす形で回避。
「行使術式、射撃！」
「反射壁」
自動起動する悟の宝具が優の射撃を跳ね返す。
「おい！」
跳ね返した、というよりはそのまま優に向かって放たれる。

「追従、射撃」
一撃目を優が右手で払いのけると、悟の打ち出した二撃目が優の左肩にヒットする。
「ぬおおおおっ」
痛みでびりびりとするが、貫通はされていない。左肩に極小の防御壁が展開されている。
「助かったぜ、守護者」
「イエス、というより回避してください」
「うっせぇ」
優が守護者に毒づくと、悟が剣を両手に構えていた。
「変形、双刃槍」
剣を二本あわせて一本にする悟がそれを手の中でくるくると体の前面で回しながら接近してくる。触れただけで物質を溶解させる出力の刃に、優の射撃が全てはじかれる。
「やべ…」
一発くらい当たるだろう、と思ったが悟は双刃槍を解除して、二刀流で優の眼前に迫っていた。
「うおりゃ！」
優は下がらずに悟に向かって突き進み、右拳を突き出す。
「！」
思わぬ攻撃ではあった。行使者が行使術式に頼らず、物理的に殴るという行動をするとは思わなかった。悟の思考が瞬間的に止まる。
優の拳が悟の左顔にヒットする。
「行使術式、衝撃！」
ずんっと追い込みをかけるような振動を受けて、悟が落ちる。
「いっくぜえええええ！燃え尽きろ！」
優は両手を空に掲げると、そこに純粋な力が収束されていく。
「行使術式出力、限界を確認、余剰分を制動します」
守護者が優の行使術式に対して制動をかける。
カットオフされた出力の…それでいて強力無比な射撃が放たれる。

「いやだからな、遅いんだよソレ」
背後に空間跳躍（ジャンプ）してきた悟が剣を優の首に押し付ける。
「くそっ、これでもだいぶ短くなったんだぜ」
優は両手を挙げて降参する。
「短く、早く、重ねるとかいう考え方ねぇの？」
けらけら笑う悟に優はため息を吐く。
「俺のポリシーに反するってーか。ちまちまできねぇんだよね」
「変なポリシーだな」
悟は剣を宝具（ディスク）に戻して、戦闘終了。
「仮想空間（バーチャル）じゃなくて実際に戦闘してるからな。寸止めっていう技術がないお前と戦うのは正直、死ぬかもって思うわけだ」
「死にはしないだろ。死ぬほど痛いか、殺してくれって思うくらいだと思うぜ」
「どっちも嫌だっての」
悟が目に手を当てて空を仰ぐ。
「でも…こいつ壊れないな」
「だね」
優がしみじみに言うと、悟がうなずく。
「俺しか知らなかったけど、お前の行使術式（プログラム）の出力数値（アウトプット）って並外れてるからな。宝具（ディスク）がお前の膨大な演算に耐えられないで処理自壊したりしてたんだよな…」
「そうなんだよな。壊したくて壊してるわけじゃないんだけどなぁ」
優はしみじみと呟く。
「ちょいと全力、いってみるか」
「遠慮します」
優は冗談交じりに尋ねると守護者（ガーディアン）が即答するのを見て、悟がクスクスと笑う。
「じゃあ少し外すぞ」
「了解」
優は守護者（ガーディアン）を外して悟に投げる。

「こんなの世界行使術式機構（ＷＵＯ）が知ったら、俺どうなるんかね」
「暗殺されるか利用されるかだろ」
悟が呟くと、優はそうだろうな、と思った。
「ぶっ放すぜ、このふざけた世界」
「やっちまえ」
悟も優も世界が嫌いだった。
だから、ぶっ壊したいと思っていた。
右拳を突き出して、親指、人差し指と順に指を開いていく。半身の優の手の平に力が収縮して…開放された。
世界が真っ白になる。一本の閃光が空を翔ける。
「やっべぇ…」
優が呟く。何となく視界に入った月に向かって放ったが、直撃すれば確実にあの程度の質量物体は消失する。
「お前…しゃれにならないぜ…」
悟も軌道に気付いて唾を飲み込んだ。
わずかに反れた…？
依然輝く月に優と悟は脱力すると、何かがこっちに向かって飛んでくる。
「あなたは…月を破壊するつもりですかっ！」
ぼろぼろの学園制服を着た桃花が優を怒鳴りつける。
「え？ちょっ！あれ？桃花ちゃん自衛艦隊の護衛は？」
悟が尋ねると、桃花は悟の格好に目を丸くしたがすぐに我に返った。
「失敗です。予定海域に到着したところで撃沈されました」
間に合わなかった、ということだろう。
「ま、まぁ失敗もあるよな」
「気にすんなよ」
悟と優がなだめようとすると、桃花はため息を吐いた。
ふわ…と桃花が後ろに倒れる。空の上でまるで支えられるものが

なくなったかのように、彼女の体が後ろにのけぞった。
「おいっ！」
優は慌てて桃花の腕を掴んで墜落を阻止する。
「気を失ってるぜ…」
悟が心配そうに言うと、優たちは優の部屋に戻って桃花を横にする。
「大丈夫なのか？」
聞かれても優は医者ではないし、なんとも言えなかった。
「怪我してないか調べるか」
優は桃花のブレザーに手をかけて脱がそうとする。
「まずくないか？」
「き…緊急事態だろ…」
まるで自分に言い訳をするように優がボタンを外す。
「外傷はありません。行使術式（プログラム）による過労が原因です」
守護者（ガーディアン）がそういうと、優はどこか悔しそうに手を引っ込める。
「やべ…俺も眠いから戻るな」
「え？待てよ」
優が慌てて悟を引きとめようとするが、悟は聞かずに部屋を出て行ってしまう。
「行使術式（プログラム）の行使（ラン）は負荷がかかるので、その反作用でしょう」
「知ってるよ。あいつとは付き合い長いからな。行使術式（プログラム）を展開できなくても素養はあるんだ」
優は守護者（ガーディアン）に言うと、桃花を見下ろす。
すぅすぅと寝息を立てている桃花の顔は、明るいところで見るととても酷い状況だった。
煤のような汚れが付着して、肌が露出した部分にもそれが見える。
優はタオルを水で濡らして桃花の顔を拭いてやる。
なんでまた、こんなになるまで…。
自分とは関係ないはずの人間を守るために出撃して、痛い思いもするだろう。

それでも戦って、戦って、何を得るというのだろうか。
行使者（ユーザー）とか人間とか…分類分け（カテゴライズ）されて。
能力があればあるほど、道具のように使われて。
優はいつか桃花が死ぬのかもしれない、と思うとその顔を見ていられなくなって、窓から外を見回した。
この国には戦争はない。それなのにどうしてそういう場所へ行かされるのか理解できなかった。
「月を壊さないでくださいよ？」
桃花が目を覚まして、優は振り返った。桃花がベッドで上半身を起こして優を見て困ったような顔をしている。
「こわさねぇっての」
「よかった」
笑顔を浮かべる桃花に優はなんと言葉をかけていいかわからなかった。
とりあえず、間が持たないのでテレビのスイッチを入れる。
「先ほど、交戦により撃沈したイージスは緋村桃花特Ａ級行使者（エースクラスユーザー）の到着するよりも前に撃沈されており、その現場に到着した緋村さんは救助のために対艦戦闘機と交戦、これを見事に殲滅しました。残念ながら生存者の数はわかっておりませんが、日本魔法省（ＪＰＭ）は直ちに攻撃した国へ強く抗議し…」
沈痛な面持ちで喋るアナウンサーを優はぼーっと眺めていた。
早くて二日で戻れる。
それよりも早く戻って来た理由はこれだった。護衛対象がいなくなってしまったのだから、戻って来るに決まっている。
たった数時間の間に、平和な場所から戦場へ。そして戻ってくる。
それがどんな気持ちなのか優には想像ができなかった。
「私も交戦（エンゲージ）したんですけどね…。私は偵察型行使者（サーチタイプユーザー）に分類されているんですよ。生存者はゼロです。救助の必要はなし。そう打電しました」
「な…んだと？」

優は信じられないような話を聞かされて、耳を疑った。
「敵機はそれでも艦爆を続けましたから、交戦したんですけどね。爆撃機の次は護衛の戦闘機ですよ。イーグルを八機落としましたが、こんどは陸から対空砲火です。弾幕の間を避けて、攻撃しようかと思ったんですが、無駄じゃないですか…。だから緊急回避の空間跳躍（エマージョンジャンプ）をしたんです」
「そう…だったのか」
まったく想像できない。
「目標固定（ターゲットロック）されちゃってたんで、行き先も決められなかったんですけど…。偶然優くんの行使術式方向（プログラムベクトル）を感知して、そこに飛んだんですよ」
「そうか…むしゃくしゃして撃っただけだったけど、役に立てたな」
優は空笑いをすると、桃花もにこりと笑った。
「日本自衛隊を攻撃した政府は、誤認情報により敵国と勘違いした、と声明を発表しました」
「なんだとっ！」
「ひどい…！」
優と桃花は、アナウンサーの信じられないような演技をしている口調で、聞かされたことに対して驚いた。
「ひどい…話だと思いませんか？」
桃花が俯いて、ぽつりと言った。
ひどい話、程度で済ませられるようなことではない。それでも日本政府は抗議、で終わらせるのだろう。
「間違いで人が死にます。そして私は何も出来なかった…」
「お前のせいじゃねぇだろ」
優はそう言いつつも、桃花を見ることができなかった。
気分転換にでもとチャンネルを変えても、そのニュースしかやっていない。
視聴者の声を放送している局では、桃花を擁護するような声もあった。まるで日本が戦時中に逆戻りしたか、オリンピックでも行わ

れているかのような、日本、桃花はよくやった。悪いのは相手である。と豪語している。
「優くんは気付いてますよね」
桃花に言われて優はドキッとした。
「おかしな話だと思いませんか？私は交戦（エンゲージ）しました」
「そうだってな」
優は桃花の前では決していえないことがあった。感じていても、考えていても当事者の前では言えないことも…ある。
「交戦（エンゲージ）ということは私も人を殺しているのに、なんで私は擁護されるんですかね。戦争は殺し合いなのに」
「やっていることは変わらない…。確かにそうだな」
テレビに寄せられる、賞賛擁護の声は今の桃花にとって辛いものだ。
優はテレビを消すと、二人の間にしばらく沈黙が訪れる。
「帰りますね、お邪魔しました」
「大丈夫なのか？」
「甘えていられませんしね…」

桃花を女子寮まで連れて行った。
ありがとうです、と桃花は寮に入っていくと他の女子たちは優を見て驚いた様子だったが、桃花を迎え入れていた。
翌朝になってもニュースの話題は日本自衛隊が攻撃されたことについて、ボランティア活動を行っていた自衛隊が攻撃されたことについて、国連が攻撃国に対して武装解除の命令を出すかどうか、という話に変わっていた。
うんざりするようなニュースが流れていても、優たちの日常は変わらず、いつものように寮を追い出されるよりも早く、学園の屋上に優は来ていた。
「優くん、おはようございます」

いつものように、桃花が優を出向かえた。フェンスに寄りかかるようにして、屋上の入り口を見ている桃花と視線が合う。
桃花も優も人前では目立ちすぎるから、ここに逃げ込んでいる。先客が桃花で後から優が訪れただけの話。
「制服って何着もあるんだな」
「え？ああ、そうですね」
桃花は自分の制服を見下ろして、スカートを摘まんでみせる。
「ボロボロになっちゃいますからねぇ…。あの制服で学園にはこれません」
えへへ、と恥ずかしそうに笑うが、優はあれはあれでなんとなく胸に来るような気がしたが、それは言えずに黙る。
「元から何もなかったみたいですよね、新品の制服だと」
何を言い出してんだか…。
優は桃花の隣に立つと、二人はフェンス越しに街を見下ろした。遠くにキラキラ光る海が見える。
何があるわけでもなく、桃花は雨が降っていない限りこうしてこの場所に立ち、街を見下ろしている。優もいつの間にか桃花と屋上にいるときはそうするようになっていた。
「もしも、私たちの住んでいる世界が、見ている世界がニセモノだったらどうします？」
いつもの不思議な女の子全開で尋ねられて優は苦笑する。
「おかしいだろ。俺にはこの世界が本物で、ニセモノを知らないんだから、もしニセモノだって言われても気付かない」
矛盾している。世界が本当にニセモノであれば、ニセモノはホンモノなのだから証明することはできない。証明不可能な命題であることには変わりない。
桃花はそれを聞いて悲しそうな顔をしていた。
「何かの物語かい？」
優が尋ねると、桃花はそうですねぇ、と呟いた。
「物語で、ニセモノをニセモノと知っている主人公の私が、私だけ

しかニセモノとしかわからない世界を知っているとしたら、私は不幸なのでしょうか？」
自分だけに理解できて、他人に理解されない苦悩、ということだろうか。
確かにそれは不幸なのかもしれないが、逆に言えば自分しか知らないということは幸せなのかもしれない。
優はそんなことを思うと、どちらとも言えなくなった。
人は誰もが…そんな悩みを持っているだろう。
「まぁでも…一人しか知らないんだったら、不幸かもしれないけど、物語の私が、他の誰かと知らないことを二人で共有できてるんだったら、幸せなのかもしれないぜ？」
桃花はそれを聞いて驚いたのか、喜んでいるのか、微笑んだ。
「優くんって意外と想像力豊かですね」
「お前にいわれたかねぇよ」
優が毒づくと桃花は「そうですね」と口元を押さえて「ふふ」と笑う。
よく笑う子だった。
いつでもどんな辛いときでも、笑ってやり過ごすことができる子なのだろう。
昨日のことなど、忘れているようだ。
忘れて…いるわけ…ないのに…。
「よく笑うな」
その無理した笑いは、優には赦せなくなった。何となく、苛々する。
そんな言葉をかけてしまえば、どうなるかわかっているのに、口にした。
酷く後悔した。
やめて置けばよかったとは思わなかったけれど…桃花を殴ったようで後味が悪かった。
「笑っていないと…泣いちゃうんですよ」

「…悪かったな」
優はぶっきらぼうに言い放つ。
桃花の左目から、涙が零れた。それでも桃花は笑っていた。
「泣けばいい。泣きたいときは泣けよ。俺は何も見てない振りしてやるって」
言いつつも、桃花はどれだけのことを一人で抱え込んでしまっていたのか優には想像できなかった。とてつもなく辛いことでも、全部飲み込んだ彼女の心の中には何があるのだろう…。
「私は泣いちゃダメなんですよ」
声は既に震えていた。
「私、泣きません。泣けません。がんばりますから…」
全身を震わせて、拳をぎゅうっと握り締めていた。
「世界中のみんなが幸せになれるために、どんなときも笑って、戦いますから」
必死に…笑うんだな。
辛そうに…哀しそうに…。
世界は何もしてくれないと絶望に嘆くこともせずに。
救えなかった人のことを全部自分のせいだと背負い込んで、それでも笑えるんだな。
「がんばりますよ」
優は桃花の頬に手を当てて、涙に触れた。
暖かくて、冷たかった。
「でもよ…お前泣いてるぜ」
桃花は慌てて顔を袖でごしごしとこすって、笑ってみせるがすぐにまた涙があふれてきた。
「あれ？おかしいな…泣きたくなんかないのに…」
困ったように、弱々しい声で桃花が何度も顔を拭いた。
止まんない…私が笑っていないとみんなが不安になっちゃうのに…。
焦れば焦るほど、だめだった。

視界がぼやけて、優の顔がぼやけてしまう。
人前で泣いたことは一度もなかった。大丈夫、出来る、まだ大丈夫。そう思って身を奮い立たせていた。敵はたくさんいたし、判断は一瞬で行ってきた。
人前で泣くことはできなかった。
優がいるのに…涙が止まらない！
一度塞き止めているものが崩れてしまったら、限界はすぐそこだった。
「ふぇ…ふぇええええん」
泣き崩れた桃花を優はそっと抱きしめると、桃花が完全に声を上げて泣いた。
優にはそれが、桃花の心が…精神が悲鳴を上げているようにも感じられた。
泣きじゃくる桃花を優はじっと見下ろす。
とても…とても小さい女の子は同い年なのにもっと幼く見えた。
面倒なことから逃げて曖昧に生きていた自分とは対極にいる。そんな桃花は正直、疎ましくも思えた。自分とは違うと勝手に決め付けていたのだろうか。
そんな子が…泣いていた。
どんなことにでも努力して、耐えていたのだろう。まっすぐに向き合ってがんばっていたのだろうか…。
この差はひどく遠い。
同じだったのは年齢だけなのだろうか。
優は何も言えずに桃花を受け止めていた。
桃花は一頻り泣いて、泣き止んでも優の胸に抱きついていた。
「予鈴、鳴ったぞ」
優が言うと、桃花はそっと優から離れた。
「こんなつもりじゃなかったんですけどね」
とまた笑みを浮かべる。
「たまにはいいんじゃないか？」

「…本当、悪い人じゃないんですよね、優くんは」
「なんだそりゃ」
優も苦笑すると桃花はぺこりと頭を下げた。
桃花は屋上から去っていった。
「悪い人だったら気兼ねなく殺せたのに…」
誰にも聞こえない声で桃花は呟いていた。

一章　三節　机上の行使術式

「私、がんばりますからっ！」
そう小さな身体で元気よく、笑顔で走っていく桃花を思い出して、優は屋上で寝返りを打った。いつもの習慣は身体から抜けない。午前の授業を自主休業していた優はまた寝返りを打つ。
弱さを隠し続けられる桃花はきっと、強いのだろう。
そんなコトを考えていた。
午前の授業が終了して教室に入ると、悟は桃花の席を指差す。
「今日も午後出勤ご苦労様です、社長。桃花ちゃん欠席みたいだぜ」
冗談半分で言われて、優はあんなことあったしな、と何となく納得していたし、クラスメートたちも昨日の今日だからと何も言わない。
教室には結局…戻らず、か。
アフターファイブになっても桃花は姿を見せず、優は担当の京と向かい合っていた。
「てっきりフケ込むと思ったんだが、どういう心境の変化だい？」
授業を淡々と受けて、十九時を回ったところで終了すると京が不気味なものを見るような目で優を尋ねる。
確かに優なら途中で抜け出してしまうこともするだろうが、今回はそうにも行かなかった。
「出席しないと命の危険性があるものでね」
「聞いたのかい、暗殺命令」
「一応」
優は正直に答えると、京はうなずいた。
「まぁそんなことよりも、寮に戻ってもやることねぇんすよ」
「若いのに何を言っとるんだ、お前は」
寂しい奴だ、と京が哀しそうに笑う。
その笑顔がなんとなく、桃花の笑顔と重なって優はふと尋ねた。

「桃ちゃんの失敗ってどうなるんすか？」
「失敗…ね。あれは桃花のせいじゃないと見解が出てるよ。本人はどう思ってるか知らないがね。まぁこの様子じゃ自分の責任だと思っているだろうね」
世界には…どうしようもないこともある。と言外に言っているような気がした。
「あの子がもし、失敗したと感じているなら、あの子は始めて失敗したことになる」
「そうなんスか。やっぱり桃ちゃんは初めて…」
桃花はスゴい奴なんですね、と言おうとして止めた。何十回も出撃していて、今回が始めての失敗なら確かにすごいのかもしれないが…桃花は決して強くはない。優はそれを目の当たりにしていたから、言えなかった。
「優、これは私の予感なんだが…お前はあの子と同じ世界に飛び込もうとしてるんじゃないのか？」
優は言われて、ハタと気付いた。自分があれだけ嫌がっていたアフターファイブに出席して、話を聞いていた。そして覚えることに熱中していたのも事実だった。
「誰かを守るための戦いに行くと？」
それを聞いて京はにやり、と意味深な笑みを浮かべる。
「また随分とキレイな言い方をするじゃないか。でも綺麗事ばかりじゃない、と言うのも勘付いているんだろう？」
「ええ、まぁ」
優は頷くと京は「そうかい」と呟く。
「教えてる人間が言うのもなんだけどね、私たちの技術は確かに世界革新（イノベーション）を…社会基盤をそっくりひっくり返したよ。いいことがあれば悪いこともある。それが両極端に顕現し始めてる。私たちよりも若い世代のあんたらがどうするかは、あんたらが決めることだけどね、行使者（ユーザー）の存在を完全に人間に納得させるのは不可能だよ」
蟠りは確かに存在していた。人間は行使者（ユーザー）を恐れることもある。

まるで天敵のように存在している行使者（ユーザー）は、その意思で簡単に人を殺せるのだから…。
「高名な科学者が可能であると言えば、それは可能である。そして高名な科学者がそれは不可能であると言ったのならば、それは疑ったほうがいい」
優が小さな声で呟く。
窓を開けて、守護者をセットしたグローブを左手にはめる。
「行使術式（プログラム）、起動準備（スタンバイレディ）」
「準備完了（セットアップ）」
優の言葉に守護者（ガーディアン）が答えた。
「飛翔（フライハイ）」
「行使（ラン）」
ふわり、と地面から両足が離れた。
「それを知ってるならこれも知ってるな？」
京は優の背中に言った。
「急速に発達した科学は…」
「魔法と区別がつかないってんだろ？」
優が遮ってその続きを口にすると、京がふっとわらう。
どちらもＳＦ小説作家、アーサー・Ｃ・クラークの言葉だった。
「だからこそ俺は思うのさ。人間と行使者（ユーザー）がいがみ合ったりとか、世界が矛盾で荒れていたとしても、それをできるだけ摩擦のない世界にしようとする桃花に賛同する」
「ひねくれもんが、どういう心境の変化なんだか…」
言われても優は不思議と頭に来ることは無かった。
「可能性の限界を測るには、不可能であるところまで行ってみるしかねぇだろ」
「やってみろ」
優は外へ飛び出した。
まっすぐ上空へ飛翔。
高く、どこまでも高く。

そして足元を見下ろすと、街がものすごく小さく見えた。
灯りが無理やり押し込められているような世界を見下ろす。
「桃ちゃんも空でこういうの見てるのかな？」
「イエス」
律儀に守護者（ガーディアン）が答える。
「矛盾（パラドックス）を矛盾（パラドックス）で相殺する。行使者（ユーザー）はそれが可能だ」
「そのようですね」
「なら、まず桃ちゃんの矛盾（パラドックス）を解明しようか」
行使者（ユーザー）は科学者である。
科学者は事象の究明を求める。
だからこそ優はそう思った。
「可能である限り、助力しますよ。マスター」
「よろしい」
優が答えると、守護者（ガーディアン）がきらり、と光った。
笑いながら、泣きながら…彼女は辛い思いを一人で抱える。
その重みで彼女が崩れてしまう前に、壊れてしまう前に…。
救ってやらなければならない。
優は泣きながら微笑みを浮かべようとする桃花が忘れられなかった。

行使術式（プログラム）、と呼ばれる世界根源の規定（ルール）を改変実行させる行使者（ユーザー）は、その効果を発生させるのに得意作業が存在する。
またその作業を円滑に進める速度や効果範囲など、さまざまな要因から改変できる世界に干渉する能力によって世界行使術式機構（ＷＰＯ）によって階級分け（アスライズ）されている。
アフターファイブに入った優はさまざまな技術的な根幹である知識を叩き込まれていた。
「魔法っていうと、女の子とかが、ばしばしやったりとか、クソ長い呪文みたいの喋るイメージがあったんだけどさ」

「そんな無意味で視聴者を喜ばすような作業は殺し合いにいるとおもうか？」
京の姐さんは腕を組んでため息を吐いた。
「ロマンはいるだろ」
「いらん。コスチュームなら制服で十分だ。ちなみにくそ遅い詠唱時間をぺらぺら喋っている間があったら近代兵器のほうが殲滅速度は上がる」
ごもっともで…と優はため息を吐く。
「基本戦術に関してもそうだが、接近戦（クロスレンジ）に入る前に砲撃（シューティング）を行う。そんなもので死ぬようなら相手は格下だと思えばいい。問題は接近戦（クロスレンジ）、中間距離（ミドルレンジ）での戦闘になる。お前の志望する、軍及び治安機関ないし世界行使術式機構（ＷＰＯ）の前衛的抑止部隊は戦闘がメインになる」
「それなんだけど、どうして砲撃戦闘（シュートレンジ）で仕事が終わるんだ？戦争は制圧して終了するもんだ」
「制圧するものをぶっ飛ばすからだよ。基本的に対象は人、ないし道具であって場所ではない。私たちは戦争をしているのだが、実のところ宝具（ディスク）の確保か対象の捕縛がメインになる」
京に言われてなるほど、と優は納得した。確かに危険なものはぶっ壊す、危険人物なら抹殺する。そうすれば制圧の必要性はない。
「砲撃戦（シューティングエンゲージ）なんてのはな、くそくらえ、だ。あんなもの回避すればいい」
「言ってくれるぜ」
京らしい発言に優は項垂れる。
二日目、最初に行われた模擬戦闘（シミュレーション）は学園上空に封殺結界（シールフィールド）を行使して、周囲に影響が出ない形で行われたが、あの雨嵐のような弾幕（ラン）の全てを回避することは人間の反射神経では不可能だ。
秒間二十八発のスプレーミサイルランチャー四基の前に立っているのと同じ状況、という仮想訓練（シミュレーション）だ、と京は楽しげに砲撃を開始。優は二秒で撃墜された。

「さっきみたいなのは絶対に回避不能だっての」
思い出しても吐き気がする。全身がびりびりと熱いし、制服はぼろぼろになっていた。
「絶対はない。回避行動は大きく分けて六つだ。機動力に任せて避けるタイプが桃花だな。あいつは元々偵察型(サーチタイプ)行使者で訓練を受けていたからね。感覚神経増大や走査系(プログラム)行使術式に長けてる」
「あの火力を保有してか？」
見せられた戦闘映像を思い出して優はうんざりする。
「まぁ…あの子は攻撃されたらその数十倍の火力を相手に叩きつけるからな。一時期、偵察形（笑）の桃花さんは圧倒的な火力を保有していますね。なんて週刊誌に書かれたくらいだ」
「笑い、で済ませるのかよ」
「しょうがないだろう。偵察とか何とか言う前にあの子は見敵必殺の状況下で常に身をおいていたからな」
「へぇ…」
人の過去は模索しない。だから模索されたくない。
優は聞き流すと、京はにやりと笑う。
「行使者(ユーザー)の戦闘は、短期決戦だ。すれ違ったらどっちかが落ちる。絶対的な虚数と虚数のぶつかり合いだ。ためらいはいらない。下手糞な呪文だとか、イミテーションに過ぎない衣装、振り回すだけの魔法杖(スティック)はいらん」
「あんたは世界中の何かを敵に回すタイプだ」
「敵は潰す、それでいい」
「…」
人の形をした何かを感じて優は何も言えなくなる。
「とは言え、形骸化されていないものも確かに存在する。行使術式(プログラム)は世界に干渉するものだ。そのきっかけとして、武器のようなものを保有して自分の行使術式(プログラム)を世界に干渉させやすいようにするのなら話は別だ。メルティアルの大剣(クレイモア)とかがそうだな。私の知ってるのだと大型狙撃銃を左手一本で振り回す奴もいる」

「近代兵器と行使術式(プログラム)を組み合わせた…さくら姉か？」
「あれは特別だよ。あの子は近代兵器だろうと何だろうと使いこなす」
世の中、化け物のような力を持っている連中が多くなった。
「人間が、行使術式(プログラム)を自在に操る行使者(ユーザー)を嫌う理由がわかったぜ。同じ行使者(ユーザー)だって自分より上位の行使者(ユーザー)に畏怖するからな。人間からみたら神か何かにしか思えないぜ？」
「神、か。神こそ形骸化された思想だと思うがね。私たちは生まれたときは人間だった。行使術式(プログラム)など扱えなかった」
「人が人で無くなる瞬間は確かに存在するだろうよ。ただ、俺たちはその瞬間を越えてなお、人でいたいから人に依存するんじゃないのか？」
「哲学的でよくわからんな。お前の昔の話に何か関係があるのか？」
聞かれて優はそっぽを向く。
「あー、いい天気だ」
あまりにもわざとらしくて、京は何も聞く気がなくなった。
絶対に喋られない、優が頑なに口を閉ざすならば聞き出すときは殺し合いになる。
それはまだ望まれてはいないことだ。優の固有行使術式(パーソナルプログラム)を解析(アナライズ)後殺すならまだしも、それが世界にとって善し悪しもわからないまま抹殺するのはもったいない。
「頼みがある」
「なんだ？」
優が真剣な顔をして京を見ているのに、京は不気味さを覚えた。いい加減な生徒が真剣な顔をしているときに限って、それはけっこう面倒だったり厄介だったりするのは教師生活を始めて思い知ったことの一つでもあった。
「この授業、アフターファイブの密度を上げてほしい」
「それは？」
「早く終わらせたい」

「お前の技量次第だな」
京が鼻で笑うと、優はうなずいた。
勉強、などというものは今まで一切興味がなかったし、行使術式(プログラム)に対して特別な思いがあったわけでもない。ただ、それを覚えることで自分が最も知りたいことがわかるような気がした。
「生きること、死ぬことは表裏一体なんかじゃない。それが基本だ」
京のアフターファイブが開始された…。

数十倍のペースだ。
京はそう思った。
吸収力は空っぽの頭に叩き込むのだから早いと思えばそれまでかもしれない。ただでさえ優は学習能力が一般教養も早かったのだから、それが大した問題でもないのかもしれないが、精神力がとても精細なものだった。
組み上げる行使術式(プログラム)はどれも芸術的で素早く、無駄がない。
ムリを言われてもそれに応えるのが教師だ。
優の提案した一日二時間のアフターファイブを二時間増やしてほしいと言われた。それに応じたところですぐに能力や理解が上がるわけでもないのだが、一度やってみてわかった。優は一般の人間よりもはるかに早い理解能力を持っていた。
テキストを読ませるわけでもなく、ノートに何かを記入するわけでもなく。彼はただ自分の発言を寝ているのか、起きているのかわからないが、ぼーっとしている間に理解していた。気持ち悪いほどの頭の回転の速さ。
四日目にしてほぼ全ての基礎修練を終了、桃花が無断欠席からアフターファイブに姿を現した。
五日目のアフターファイブ。
優と桃花は京がやって来るまで教室で待機している。
十五時四十分に学園の授業は終わり、十七時までだいぶ時間があ

る。この時間はアフターファイブに参加する生徒がその準備や気持ちの整理をつけるために設定されている時間らしい、と優は聞いていた。
「そう言えば、秋雨先生（秋雨の姐さん）が言ってたけど、特Ａ行使者と天使旋律って呼び名があるよな？」
「はい？」
桃花が突然聞かれて首をかしげる。二人きりの教室なので会話がないと気まずい優の何となく発した言葉に桃花が笑顔で優を見た。
「私の固有行使術式の名称が天使旋律、でして…。異名や通り名みたいなものですね」
「うん、それで天使旋律ってどんな行使術式なんだ？」
「音…旋律だから指定対象地域発動型？」
「だめです、それは秘密ですよ」
桃花がくすくすと笑い、唇に人差し指を当てて「しー」と言った。
「…異名が付くくらいなら魔法省（ＪＰＭ）の記憶中枢に記録されてるんじゃないのか？」
「さぁ、どうなんでしょうね。誰も知らないはずですよ。私以外は。だって観測されていないことなのですから」
「待てよ、観測されていない事実は記録されないのはわかるが、何でお前の行使術式が記録にないのに呼び名として残ったんだ？」
「秘密、です」
桃花はそれ以上取り合うつもりもないのか、そっぽを向いた。
「三日間、いろいろ考えました」
ふと桃花に言われて、優はうなずいた。
「迷ったのか？」
「いえ、私は飛び続けようと思います。私のために」
「その空に何があると思う？」
優に尋ねられて桃花は苦笑する。
「私の探し物はどこかにある気がするんです」
何を探しているのか。

優にはわからないが、桃花の慈善事業で空を飛んでいるわけではないのだろう。
むしろそっちのほうが人間らしくていいとも思えた。
純粋に誰かを守るために飛んで、戦って、そんなくそったれなバカ野郎はいつか落ちる。
むしろそういう連中は醜悪で気持ち悪い。
「そういえば優くん、アフターファイブ嫌ってたのにどうしてやる気になったんです？」
「さぁなぁ、なんだかよくわからないんだけどさ…、守られてる側にいるだけって俺は性に合わないらしい」
「嫌味っぽいですね」
桃花がふぅとため息を吐いた。
「知ってます？優くんの測定された行使術式（プログラム）の使用容量（キャパシティ）は私より大幅に高い値を示しています」
「そうみたいだな、でも固有行使術式（パーソナルプログラム）は不明な状態だ」
「覚醒前の状態なら良くあることです。本来、固有行使術式（パーソナルプログラム）を保有している行使者（ユーザー）は初めに固有行使術式（パーソナルプログラム）を展開させるんですけどね…。ソレは覚えていないのでしょう？」
「ああ、覚えてない」
優の断言に桃花はなるほどーと呟く。
「俺には固有行使術式（パーソナルプログラム）がないとかいうオチは？」
「それも含めて調査中だと」
桃花が「わからないことだらけですね」とうんざりしている。
「おそらく、優くんの大きすぎる容量（キャパ）や固有行使術式（パーソナルプログラム）が宝具（ディスク）に大して影響を与えているために、宝具（ディスク）が瓦解（ブレイク）しているのではないでしょうか？」
「だとすると俺は一生立派な行使者（ユーザー）って奴にはなれないな。宝具（ディスク）を扱って二流だろ？」
「そんなことないですよ。宝具（ディスク）を使うのが二流だなんて今の世界ではそうですけど、宝具（ディスク）は元々なくてもいいんです。行使術式（プログラム）を使え

ない人用に調整されたのが宝具（ディスク）なんですから」
あくまで人間が基本で世界が回っているのだから、と桃花が考えを訂正させる。

一章　四節　天使は静かに激怒する

それでも優は何と無く納得していないようだ。
「そうですね、実は私は宝具（ディスク）を使ったことはないんですよ。守護者（ガーディアン）は私の援護（カバー）はしてくれましたけど直接命令入力（コマンドインプット）をしたことはありません」
「そうなのか？」
優は装備していた守護者（ガーディアン）に問う。
「はい、直接命令入力（コマンドインプット）された履歴はありません」
「俺のは自動でカットしてるんだっけか？」
優は前の出来事を思い出して呟く。
「イエス、私には自己保存定義がありますので瓦解されるような入力は無条件で安全な値まで解除します」
「お利巧さんだこと」
優が呟くと桃花が苦笑する。
「いまいちわかんねぇや」
優が伸びをすると桃花が立ち上がってブラックボードの前に立ち、ホワイトマーカーを片手に持った。
「こういうことです」
桃花が文字を書き込んでいく。
1、　行使者は人間に対して危害を加えてはならない。またその危険を看過することによって人間に危害を加えてはならない。
「これは…人間と行使者を明確に分類分けている項目ですね」
「んー？桃ちゃんは犯罪者とかを行使術式で攻撃したりしてるよな？」
優の疑問に桃花は鋭いです、とうなずく。
「そうですね。私は全ての危険に対してそれを看過して危害を加えてはならない。後者のほうを優先して行動したので…四日前の交戦でも行使術式を行使しました」

はっとして優がバツの悪そうな顔をする。桃花にとって嫌な思い出だろうから触れないようにしていたのにこれだ。自分の軽率さに嫌気が刺す。

「よくよく考えると酷い事だとは思いませんか？命を天秤にかけろというようなものなんですよ」

桃花はそう言うと次の文字を書いた。

2、　行使者は人間に与えられた命令に従わなければならない。ただし、1に反する命令の場合はこの限りではない。

「あまり重要視されてないんですよね。一応規定としてはありますけど…要人暗殺とか出ますからね。この人間は自分の所属する部署の上位者に置き換えると、わかりやすいかもしれませんね」

桃花がさらりと言うのに優は言葉を失った。

暗殺、とかそういう単語が簡単に出てくる環境にいるのだとすれば、それは哀しい事ではないのだろうか…。

「要は…人間は殺したらまずいけど、行使者は別にこれに含まれないのですから、殺しちゃってもかまいませんってことです」

笑顔で言われて優は「あー」と呟く。

何かが壊れている…狂っている。そして自分は殺される側なのか、とぞっとする。

「三つ目です」

桃花が文字を書き入れる。

3、　1と2に反することのない限り自らを守らなければならない。

「宝具もこれと同じ定義を入力されているので、自己保存の法則を優先して優くんの無茶な行使術式出力をカットするんです」

「無茶で悪かったなおい…」

優が項垂れると桃花が可笑しそうに笑った。

「世界行使術式機構（ＷＰＯ）は世界全てに対して予め行使術式出力を抑制する封殺結界を行使しているんですけれども…それでもなお、あの出力を発揮するとなると大したものです。今回の暗殺命令はそれが仇になってますがねー」

桃花がブラックボードの文字を消す。
「出力のみで言うならば特A級（エースクラス）だと思いますよ」
何の慰めにもなっていない言葉に優はそっぽを向く。
子供のような対応に桃花はため息を吐く。
「おーし、始めるか…」
秋雨が教室に入ってくるとどこか物憂げだった。桃花は優の隣に座る。
「優は昨日で学科が終わった。これから実技とかだが…。筆記テストは八十六点でぎりぎり」
「八十五点以上だっけ…？」
優が首を傾げると秋雨がうなずく。
「組み上げた行使術式理論（プログラムロジック）のほうは恐らく行使可能（ランポッシブル）だと日本魔法省（ＪＰＭ）から返信が来た。が、あれは大量無差別殺戮兵器保有禁止条例の行使術式（プログラム）の一覧で禁止項目に入るぞ」
とんでもない行使術式（プログラム）を組み上げたものだ、と先ほど国からお叱りを受けた。それに対して秋雨は「アタシが汲んだわけじゃねぇぞ、くそったれ野郎」と罵倒したばかりだった。
「どんなものを組み上げたのか想像するのが怖いですね」
桃花が呟くと優がにやりと笑う。
「今日から実技だ。着いて来い」
秋雨が教室を出て桃花と優がそれに続く。
十七時を回っているのだから廊下も暗くなり灯宝具（ランプディスク）が廊下を照らしていた。
一般生徒立ち入り禁止の地下室に入ってドアを開けられるとだだっ広い空間が現れる。
「地下にこんな部屋があったのか」
優が呆然とすると桃花も驚いているのか周囲を見回している。
「壁面には強固な封殺結界（シールフィールド）が張られてるんだ。学園のシェルター兼訓練部屋だな」
秋雨はそう言うと左手にすっぽりと収まる程度の大きさの卵のよ

うな塊を取り出す。
「ウェアブルコンピュータ？」
「そうだよ」
秋雨が答えるとＨＵＤディスプレイが表示されてキーボードのようになり、それをタッチする。
「空間設定は廃棄都市（旧東京）だ。それくらいの広さがあるからちょうどいい」
秋雨が実行のボタンを押すと空間にノイズが走ってぼろぼろのビルや道路、折れ曲がった看板や今にも崩れそうな高速道路（ハイウェイ）だった残骸が表示される。
「私が殲滅強襲型行使者（デストロイタイプユーザー）だとは説明したな？桃花が偵察型行使者（サーチタイプユーザー）だ」
「えっと、俺は攻撃型行使者（フロントアタッカー）だっけ？」
優に秋雨が頷くと秋雨は桃花を見た。
「桃花、優と接続（リンク）してくれ」
「はい」
桃花は頷くと優の前に立つ。優は反射的に一歩、後ろに下がった。
バーガーショップの一連を思い出すとある意味、桃花は身近に置きたくない。
桃花がすたすたと近づくと同じ距離だけ優が後ろに下がる。
「…逃げないでください」
「体が勝手に…」
優が呟くと桃花がにっこりと笑う。
とて、と前に出てくる桃花、下がる優。秋雨はそんな二人の様子を見て首を傾げる。
自分を殺そうとしている奴に身をゆだねるほど馬鹿な神経は持ち合わせてない。
優はそう思うと桃花が困ったように微笑する。
「えい」
桃花の掛け声のような発声と同時に優の体が硬直した。
行使術式（プログラム）で完全に体を止められた…！

優が身動ぎするがほとんど動かない体。
「精神接続(メンタルリンク)します。目を閉じて楽にしてください。自我防壁(フィアウォール)は私が管理しますから安心してくださいね？」
桃花が両腕を広げて優に近づいてくる。
「うわあああ！死ぬ！殺される！くそったれ！死んだら復讐してやる！覚えとけよ！」
優が喚くと桃花が目を細める。
「死んでどうやって復讐するんだい…」
秋雨が突っ込むが優はそれに返す余力はない。
すっと優の顔に桃花の両手が触れた。
「うるさい口ですね、塞いじゃいます」
桃花が目を閉じて優の顔に自分の顔を近づけて、二人の唇を重ねる。
「うぐっ！？」
優が驚くと桃花がすぐに顔を離した。
「おーし完了だ」
秋雨がにやにやと笑いながら優の鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしているのを眺めている。
「え？」
いまいち要領を得ない優。
女の子の匂い…久しぶりに近くで感じたな。
優がそんなことを呆然として考える。
「たぶん、リンスの香りじゃないでしょうか」
桃花が呟いて優は驚いた。思ったことが桃花に伝わっているではないか。
「優くん、雑念とかは表層で処理しないでください。私に流入しちゃいますから…」
「え？あ、接続(リンク)…」
優はなんとなく理解した。精神情報網(ネットワーク)を使用した意思伝達の一種だ。

「限定的な接続を行いました。精神第一階表層における精神同調（メンタルシンクロニクル）です。自我隔壁も制御しているので同一化することはありません」
桃花に言われて優は自分の体を見る。変化は何もない。
（わかります？）
桃花の声が直接聞こえた気がした。
（いちおう、わかる）
優が返信すると桃花が頷いた。
「できました」
桃花が秋雨に報告すると秋雨が頷く。そして怪訝な顔をした。
「桃花、優と桃花回線（ライン）に上位上書き（オーバライド）したいんだが、暗号化水準（セキュリティレベル）を下げちゃくれないか？介入（インターセプト）できん」
「あ、ごめんなさい。どうぞ」
桃花に秋雨が頷く。優は頭の中がすっきりしたような気がした。
「おし」
秋雨の言葉と同時にまた頭が熱を持つような気がする。桃花が暗号水準（ユレティレベル）を上げたのだろう。
（優、桃花、聞こえるか？）
（はい）
「ういーす」
秋雨の言葉に優が口を動かす。
「優、相互確認したいんだ」
秋雨が困ったように言うと、優は苦笑した。
（さーせん）
「確認した」
秋雨が二人に精神情報網（ネットワーク）を介して直接情報を送り込んでくる。頭の中でそれを展開して優と桃花は目を細める。
「模擬戦闘を開始する。廃棄都市（スラム）に潜入したテロリスト中隊を一掃する」
「多いですね、百二十名？」
桃花が不安そうな顔をする。下手をすると交戦時間が長くなるし、

模擬戦闘なのだから相手の攻撃も当たれば痛い。
「抗議は受け付けない。ポイントは二つ。桃花に言うまでもないが…一般市民はできる限り無傷で例外はない」
「できる限りってことは…運が悪い奴は？」
「お前らに任せるよ」
秋雨が冗談とも本気とも取れないことを言う。
「私は隣の部屋にいる」
管制室に秋雨が去っていく。
「！」
優は瞬間的に桃花を抱えて、五階建てのビルの屋上まで跳躍する。先ほどまで優と桃花がいたところに乾いた音と同時に発砲されて銃弾が跳ね、地面が抉られていた。
「あぶね…」
優が呟くと向かいのビルからこちらに向かって銃口が向けられている。
「行使術式（プログラム）、反射（リフレクト）」
桃花が抱えられたまま前面を保護する防壁を行使（ラン）すると銃弾がそれに当たってはじけた。桃花が優の体の中からするりと抜ける。
「行使術式（プログラム）、射撃（シュート）」
優は空いた右手をそちらに向けると射撃（シュート）を放つ。桃花の反射は単一方向は反射するが別方向の行使術式（プログラム）や物理弾丸などは透過するらしい。反対側のビルの窓があったであろう場所からこちらを狙っていた人間が倒れる。
「目標の殲滅を確認（シュートザワンダウン）」
守護者（ガーディアン）が優に伝える。
桃花はその人間であった何かを見てため息を吐く。
優の射撃（シュート）によって上半身が吹き飛び、それはすでに人の姿をしていなかった。
「あなたのやり方に文句は言いませんが…」
「ん？」

優は首を傾げる。
「殲滅対象だろ？」
「人間ですよ？」
「…殲滅対象だろ…」
何をそんなに怒っているか理解できずに優はため息を吐く。
「殺さなきゃ殺されるんだろ？」
（おーい、喋るのは後にしろよー？）
秋雨の言葉が頭の中に送られてくる。
優は舌打ちする。
「これは俺の訓練だったな」
「え？」
優が残忍な笑みを浮かべると空高く飛翔する。
「な…何を！？」
桃花が止めるよりも早く、優に行使術式方向（ランベクトル）が…圧倒的な力が収束されていく。
（桃花！回避行動！早く！）
秋雨の焦るような言葉を聞いたのは久しぶりだ。
桃花はそれを遠くで聞いているような気がした。
何とかしないとあの人はダメね。
そう思うと桃花は短距離空間跳躍（ショートジャンプ）して優の地上に向かって伸ばしている手の先に現出する。
「邪魔だぜ？」
制御工程（コントロールプロセス）も完了している。あとは引き金（トリガー）を引くだけのようなものだった。
「残存する敵勢力のみならず、全ての住民に対しても危害を加えるような行使術式（プログラム）の発動は許可しません」
桃花が断言すると優はにやりと笑った。
「戦場にいるほうが悪い」
分かってもらえませんかね、と桃花は残念そうな顔をした。
「…守護者（ガーディアン）、優くんの行使術式方向（プログラムベクトル）を全て逆転（オールリバース）させなさい」

「イエス、マスター」
桃花の命令に守護者(ガーディアン)が作業すると、優の行使術式(プログラム)が全て解除(オールリリース)される。
ふわり、と優が落ちて行く様を見て桃花が悲しそうに手を伸ばす。
「なんでだよ…」
腕を掴まれて優が止められた、ことに対して抗議した。
「自分の力に溺れることは、あなたが人間だから…？」
「俺は行使者(ユーザー)である前に人間だぜ」
「落ちて死ぬのも、人間ですしね。止めなければよかったです」
桃花が呟くと、仮想空間(ヴァーチャルフィールド)が解除される。
(お前ら…もういい。今日は終了)
秋雨がそれだけ言うと精神接続(メンタルリンク)を解除してしまった。
桃花が着地すると優が手を乱暴に離した。
「ざけんなよ。なんだよお前。あのままやってれば三秒で任務達成(コンプリート)だぜ」
「ざっと六百人、あなたがあの一撃で殺したであろう数です」
言われて優は難しそうな顔をして眉間に皺を寄せる。
「廃棄都市(スラム)の厄介なところは意外と市民の数が多いところにあります。あなたの殲滅対象を自動追尾(ホーミング)する射撃(シュート)は…射線上にいる市民を巻き込む形で発動していたでしょう」
「運が悪いって諦めてもらうしかないだろ！」
優が叫ぶと秋雨がその様子を腕を組んで眺めていた。
「桃花、優。二人で模擬だ」
「はい」
桃花が返事をすると秋雨が部屋から出て行く。
「は？何で…」
優はやってられるか、と部屋を出て行こうとする。
「行使術式(プログラム)、射撃(シュート)」
極限まで簡略化された行使術式(プログラム)は即効性で、起動準備(スタンバイ)など必要としていないのは知識で知っていたが、それは魔法と変わらない。

「ぬおっ！？」
優の頭を掠めるようにして射撃（シュート）が放たれて壁に当たって霧散するが、封殺結界（シールフィールド）があるはずの壁が凹んでいる。直撃されれば確実に優は…死んでいただろう。
「何しやがる！」
優が振り返って桃花を睨もうとすると眉間に一発当たって上半身を仰け反らせる。
「痛いですか？」
「当たり前だ！」
優が力いっぱい抗議する。
「次、行きます」
優は反射的に身を屈めて部屋の中央まで移動する。桃花がそれをゆっくりとした動作で眺めていた。
「っ！」
優の眼前に桃花の上段蹴りが放たれる。首に直撃した瞬間、接点が爆発して優が吹き飛ばされる。行使術式（プログラム）、爆発（エクスプロージョン）を同時に繰り出している桃花の一撃は少女のそれとは思えないほどの衝撃（インパクト）だった。優が床を滑って転がっていく。
「行使術式（プログラム）、噴火（ヴォルケイノ）」
桃花が優に向かって手を伸ばすと、炎の柱が優の足元から噴き出して優を空高く打ち上げた。守護者（ガーディアン）の防壁（プロテクト）がなければ灰になっていただろう。
「行使術式（プログラム）…水槌（ウォーターハンマー）」
膨大な水の塊が優に当たって地面に叩きつけられる。肺の中の空気が水圧で勝手に抜ける。反射もなにもあったものではなかった。理不尽に蹂躙される。
噴火（ヴォルケイノ）と水槌（ウォーターハンマー）が重なった瞬間、水蒸気爆発が発生して左右前後から優を衝撃が襲った。
キーンと耳鳴りがする。爆発音で耳が完全にイカれた…。
「まだです…行使術式（プログラム）…」

桃花は行使(ラン)しようとして止めた。どさり…と煙の中で優が地面に叩きつけられてしばらく動かない。優がふらり、と両手で膝を抑えるようにして何とか上半身を支えながらなんとか立ち上がる優を見て、桃花は確信した。

口から血を吹き出して、床がぽとぽととその雫で赤く変色する。

恐らく…次で死ぬ。

桃花にとって生かすも殺すもどちらにせよ、それが正しいことであることは知っていた。

殺せば任務完了(コンプリート)、生かせば優は成長してくれると思った。

「私はひどいことをしていると思いますか？」

優は揺れる視界と余りにも遠い桃花の声に集中した。そうしないと気を失ってしまいそうだ。

「…死んだらどうすんだよ」

歯を食いしばっていないと倒れてしまいそうだったが、何とか言葉を返す。

「死ぬ…死んだら終わり、です」

優は驚愕した。それが人に言う言葉なのだろうか…。いや、自分もそう思っていたからこそ、さっき地域殲滅行使術式(フィールドデストロイプログラム)を行使(ラン)しようとしていたのではないだろうか…。

「ようやく気付きましたか？」

優は何も言い返せなくなった。

桃花の言わんとしている事が理解できた。

「ああ…いてぇな」

優はそう呟くと前のめりになって倒れそうになる。桃花は優に近付いて微笑むと、優は力尽きた。

「強すぎる力に惑わされてはいけないんです。強力だからこそ絶対に」

桃花は優を抱き締めると優の体から力が抜けて完全に桃花に覆いかぶさるようにして気を失った。

桃花は優を寝かせるとその頭を膝の上に乗せてやる。

「やり過ぎちゃいました…か」
「いい事だと思いますよ？」
守護者（ガーディアン）が機械（デジタル）的な口調ではなく、すんなりと答えた。
「レイシア様…宝具（ディスク）のふりなんてさせてごめんなさいね」
「かまわないよ。でも、この子は面白い子だと思うの」
少女の声の守護者（ガーディアン）は本当に興味深そうに言った。
「レイシア様もそう思います？」
「ええ、とっても」
桃花は何処となく同じ感情を保有しているその高位存在に親近感を覚えた。
「この子の制御系はたぶん…」
「なんです？」
桃花が尋ねると、レイシアはしばらく間を空ける。
「いえ、まだ確定的でないことは言わないようにするわ」
「確定、に的はありませんからねぇ」
桃花が呟くとレイシアがくすくすと笑う。
桃花は深追いせずに気にしないようにして優の髪を撫でてやる。
「うぁ…」
優が目を開く。
「頭が痛い…」
「そうですか…」
桃花は自分がしたことなので弁解することができないが、優が上半身を起こすと苦笑した。
「桃花、優、緊急招集だ」
秋雨が部屋に戻ってきて二人の様子を見て口を開いた。
「優くんは休養が必要なので私が単独で任務に」
「頼む、転送する」
「受信しました」
秋雨と桃花が短いやり取りをして、桃花が部屋を出て行く。
「ばいばい、優くん。また今度ね」

桃花が手を振って部屋を出て行く。
「優、寮に戻って安静にしておけよ」
秋雨もそれだけ言うとそのまま背を向けて出て行った。

一章　最終節　学園の守護少女

寮に戻るともはや日課になるのではないか、というほど悟が部屋に侵入していた。
アフターファイブの内容を聞きたがる悟に説明するのが日課になっていたわけだが、どういうわけか今日は怪我だらけの優を見て、悟はデバイスを片手に優の体を診察していた。
「…ひどいな、内臓までダメージ来てるぞ？」
打ち身、火傷、擦り傷…。それだけならまだしもだいぶ内側もやられている結果がディスプレイに表示されて悟は言葉を失った。
「交通事故半年分くらいもらったような怪我だな」
「福引よりも性質が悪いだろ」
優はベッドの上で「へへ」と笑うが、よくこれで歩いて寮まで戻ってきたものだ、と悟は感心していた。
「こいつ…いくぜ？」
ガンカートリッジタイプの注射器を見せて、優が嫌そうな顔をする。
「まじで？」
「おう」
ぶすり、と二の腕に針を差し込まれてトリガーを引く悟。
「ぐあっおおぅ、やばいっ」
液体を体内に注入されて優が気色の悪い声を上げる。微小機械（ナノマシン）で身体の内側から修復するものだ。
「ヴぁー、効くぅ」
優がぶるっと身体をよじらせる。壊れた細胞を修復される感覚はなんとも言い難い。
「しかしお前、そんな怪我ばっかりしてるとそのうち微小機械耐性（アンチナノマシン）がついて、機械化肢体（ギミック）と交換するハメになるぜ？」
「そいつはカンベンしてくれ」

優はうんざりすると悟がにやりと笑う。
「廃棄都市(スラム)か…」
説明された話を思い出して悟が頭を掻いた。
「廃棄都市(スラム)化した旧東京はクレーターの中で、その中には浮浪者とか違法者がたむろってるって話だったね」
「新都開発計画に最終的な後押しをしたのが、関東大震災だろ。ぼっこりそのまま東京が地盤沈下して最悪だったって話だ」
優もその経緯を思い出していた。
自分たちが五歳だか六歳だかの時の話でいまいち記憶にはないが、大変だった思いでは確かにあった。
地盤沈下で完全に機能を失った都市は廃棄され、未だに日本地図上はそこが暗部として未記入になったままでもある。再興計画はあるが、全て廃棄都市にいる連中が一切立ち入らせてくれないのも問題で、日本政府は世界からも痛烈に批判されているのが現状でもある。
「何はともあれ…ぶっ放すだけのやり方じゃだめだなぁ」
優は自分の行使術式(プログラム)に対する理解が甘かったと呟くと悟がうんうんと頷いた。
「そりゃあよ、女も強引なやり方は逃げる」
「何の話だ」
優がうんざりすると悟は「なんだろ」とワザとらしく振舞う。
「まじめな顔してなんてこと言いやがるんだお前は」
優がうーと本気で悩みだすと、悟が両手を叩いた。
「優は行使術式(プログラム)で何をどうするかって方向性決めた？」
「ん？一応、世界でトップクラスになろうと…」
曖昧に言われて悟は顔を顰めると、モバイルに守護者(ガーディアン)を接続する。
秋雨が持っていたものと同じタイプのウェアブルコンピュータだ。
「うぉ？」
どっから声を出しているのかわからないような声を出して、悟がディスプレイを眺めて目を輝かせた。

表示されている行使術式(プログラム)のどれもこれもが、起動高速化(スタートスピードアップ)、出力強化されている。無茶苦茶な組み上げ方をされているにも関わらず、整合性が図られているその行使術式(プログラム)はとある一種の芸術品のようでもあった。優は悟のように知識でそれを組み上げているわけではなく、感覚でそれを行っている。

出力制御以外は完璧…か。

なぜそれで出力を常に最大に設定されているのか理解できずに悟が苦笑する。

「結局、目に入った奴だけでも助けようって思ってるのかね」

優が先ほどの解答を出して悟は目を細める。

「くそ真面目なこと言ってるトコ悪いけど、この行使術式(プログラム)とかほとんどは、最大距離(リミットレンジ)からとある何かを狙撃しようとしているように見える」

悟の理解力をなめていた、と優は顔を顰めた。

「まぁ、そういうのが必要になるかもしれないだろ？」

「単独(シングル)起動じゃ無理だぜ、この射程距離(シュートレンジ)は桃花ちゃんみたいな観測(サー)行使術式(チプログラム)のようなものを必要としてる」

「…」

優は舌打ちすると、悟は目頭を抑えた。

「その仮想敵とやらは、とんでもない化け物だな。ＲＰＧ的にラスボスクラスか？こんな行使術式(プログラム)を行使(ラン)してみろ、日本が四、五発で沈む」

理論上可能であるから困る。悟は正直に身震いした。行使者(ユーザー)とはこんなことが可能なのだとすれば、危険視される理由もわかる。

「このアイディア…米帝なら喜んで買うだろうけどよ」

いくつかの行使術式(プログラム)を眺めて、不意に悟は手を止める。

「守護者(ガーディアン)さんよ…この表示不可能領域(ブラックボックス)はなんだ？」

「あなたには知る資格がありません。閲覧するには桃花かそれ以上の上級仕官に許可を得てください」

「あ…そ」

悟は覗き見しようとしたが、全て接続拒否（ブロック）される。諦めることにした。
「ヴぁー」
再び優が奇声を上げて悟が怪訝な顔をする。
「気持ち悪いぜ…」
「しかたねぇよ。微小機械（ナノマシン）が俺の中で駆け巡ってるんだから」
「微小機械（ナノマシン）がなかったら二ヶ月は入院ってところだろうな」
前時代の医療技術を思い出して悟が呟くと、優は「退屈そうだな」と呟く。
今の時代、医療機関は機械化肢体技師（ギミックリペアラー）と微小機械調合技師（ナノマシンプログラマー）、精神科医だけで十分だ、とまで言われるようになった。微小機械（ナノマシン）で修復不可能な身体は機械化肢体（ギミック）で補う。その技術は内臓器官まで及び、昔の呼び名である肢体技師はそのまま残ってはいるものの、肢体だけでは留まらなくなった。
眼球であろうとも、内臓であろうとも、脳であろうとも治らない部位はなくなった。
「桃ちゃんに今日はいろいろ教えてもらったな…」
「殊勝なこと言うなよ。まじで明日、日本がなくなるかもしれないって食料買い込みに行く衝動に駆られた」
悟がとぼけてみせる。明日、日本が無くなるなら食料を買っても意味がないのではないか、とも思ったが優はそれを受け流す。
「力を持つってことが強いってわけじゃなくて、強い、弱いとは別の話だってことがわかったんだ」
「そうか、それはそれで興味深いな」
悟はそう言うと、桃花で思い出したことがあった。
「正式見解でイージス護衛失敗は桃花に責任はないってことで記者会見発表されたよ」
「お？デバイス貸してくれよ」
悟は優にデバイスを放り投げると、優がそれを受け取った。
「そう言えば姉ちゃんが優もそろそろ顔を出せって剥れてたぜ？」

「むくれるって…子供かよ、あの人は…」
優は苦笑しながらデバイスを操作して桃花の情報を流し読みする。七歳で任務参加とか華々しいデビューを飾り、ありえないようなことですら完遂させている桃花の活躍ぶりを改めて見る優はふと思いついた。
「いた」
優がデバイスを悟に投げると、悟はそれを受け取ってディスプレイを眺める。
「Nシステムにハッキングか？」
「おう、そこ見てみ」
優に言われて悟は空中に写っている二人の人影を見て、拡大処理する。
桃果と秋雨が写っている。
「廃棄都市（スラム）上空だね」
悟がカメラの場所と地図を適合させて場所を特定する。
「さっき出て行ったのこれだったらしいな。でもなんでこんな場所なんだろ」
「一時間前からずっと動いてないっぽいんだ」
優に言われて悟が首を傾げる。
「監視だけにこれだけの戦力を投入する必要はないと思う。二人とも特A級行使者（エースクラスユーザー）だし」
意味がわからん、と優と悟が首を傾げる。上からの命令には従わなければならないのだろうが、そんなために同じ場所に一時間以上もずっと居続けなければならないと思うと可愛そうにも思える。
「あー、これだ」
優は自分の精神接続情報網（ネットワーク）で情報を集めて、モバイルに情報を送る。
「ああ、なるほどねー」
悟は表示された情報を読み取って納得する。
ここ学園都市で最近多発している、未成年者連続誘拐事件は特に

行使者(ユーザー)が狙われているために、警察省から魔法省（ＳＰＭ）に協力要請があったのだろう。行使者(ユーザー)を誘拐するともなれば、犯人も行使者(ユーザー)である可能性が限りなく高い。そういう意味では連携が必要でもある事件だった。

「警察からの依頼があったんだろうね」

悟も納得したのか悟を見ると、優がぴっと悟のデバイスを指差す。

新しい情報が表示される。

「ビンゴ、悟の推察通りだぜ。日本警察は桃ちゃんと秋雨先生に協力要請を出している」

「ハッキングするのは構わないが、気をつけてくれよ」

悟はため息を吐くと、優がにやにやと笑う。面白半分や興味本位でやる優に罪悪感はない。

「強襲もありえる…か」

悟が秋雨と桃花の攻撃力集中状態を見て、息を呑んだ。

「知名度(ネームバリュー)の優先かもしれない…あの二人を相手にしたら分が悪いことはわかりきってるしな」

悟は自分の考えを修正すると、優が「なるほど」と呟く。

「そういや、桃ちゃんにボッコボコにされたんだけどよー」

優が悔しそうに呟く。

「半殺しだよな、それ」

「……」

そう言われて優は何も言えなかった。

「何だよ、本当のことだろ。悔しいのはわかるけどよ」

思いっきり落ち込み始める優に悟が慌てる。

「あいつは…中距離戦(ミドルレンジ)で俺を完全に殲滅したけど、接近戦はどうなんだろ」

「やっぱりやられっぱなしって嫌か」

負けず嫌いなのは昔から変わらないな、と悟が苦笑する。

有り体に言われればそうなんだけど…。

優はやはりもやもやとした気持ちが拭えなかった。

「特Ａ級（エースクラス）と戦闘して勝ちたいなら俺じゃ力不足だぜ。特Ａ級（エースクラス）かそれ以上の人に教導頼まないと…っつーか学園五指に入る行使者の二人だからそんなの探すのは無理だろ」
悟が諦めろよ、と諭そうとすると優がポンと手を叩いた。そもそもそれ以上の人間など、本当に存在するのかも怪しい。
「あ…」
悟も一人の人物を想起して絶句する。
「貸せ」
「…本気かよ」
悟はデバイスを優に渡すと優がその人物を呼び出す。
「あら～？優ちゃーん」
間延びした声で金髪碧眼の見ているだけで落ち着くような美しい女性の顔が表示される。鳳凰院の名を冠する、一大企業のトップに君臨し、世界最強の行使者（ユーザー）、Ｂｒ級（ブレイカークラスユーザー）行使者、鳳凰院さくら、その人だった。悟の実姉で優の保護者でもある。
「さくら姉ちゃんって…階級（アスライズ）はＳ級（スイープクラスユーザー）行使者以上だよね？」
「そだよ～。私はぶれいかーきゅーですよー」
まるで酒でも入っているのはないか、と思われるほど暢気な口調。
「どうかしたの？」
優の頼み辛そう顔を見て、さくらが急に真剣な顔と緊張感のある表情に変わった。
「え、あ、いや…」
優は思い切って言うことにする。
「頼みがあるんだ」
「私の頼みは聞いてくれないのに？」
「うぁ」
今まで何度も顔を出せと言われても無視していたことにさくらが不満そうな顔をしている。
「そ…それは悪いと思ってるよ」
「思っていても行動しないとねぇ…」

意外と根に持つのは知っていたが…このままでは話が進まない。
「特A級を上回る立ち回りを覚えたいんだ。教えてくれないか？」
「…特A級かぁ」
さくらがうーんと考える。
「私に教えてもらいたいの？」
「うん」
優が正直に頷く。悟はそんな話を聞いてハラハラしていた。
「私、今、オフシフト中だからいいよ～」
優はそう言われて珍しいと感じた。さくらはその能力などで世界中から引っ張りだこにされているために、仕事が空いている時間などないと思われるほど多忙な日々を送っている。身を持て余しているなど、正月でも余りない。
「でも、特A級ってメルティちゃんとか桃花ちゃん、京姐とかもだよね？知らないかな？」
その桃花や秋雨に勝ちたいんです、とは言えずに優は視線をそらす。
「しらねぇっす」
「ふぅん」
さくらはにっこりと微笑むと視線を動かした。
「学園一年生、アフターファイブのBクラス、担当が秋雨先生で桃花ちゃんと一緒に教導受けてるのが優ちゃんになってる報告があるよー」
「…」
全部知っていてカマをかけやがった。
優と悟が息を呑む。さくらは嘘を吐かれるのが大嫌いで昔ひどい目に合ったことが脳裏に浮かぶ。冷や汗が止まらなかった。
「おっけー、明後日には行けるからお姉ちゃんに任せなさい？」
さくらはそういい残すと回線がブラックアウトする。
「俺…しーらね」
悟がデバイスを引っつかむとすごすごと部屋を出て行く。

「俺、終わったな」
優は天井を見上げて、自分の短い人生を振り返った。

同時刻　廃棄都市（旧東京）上空
命令とは言え、廃棄都市群（スラム街）を呆然と眺めているだけの仕事。
緋村桃花と秋雨京という日本屈指の殲滅力を持つ行使者（ユーザー）二人がただ上空で経過観察と抑止力のためだけに動いていると世界の他の機関が知ったら日本はよほど暇なのか、それとも馬鹿なのかと呆れるだろう。
「広域探査行使術式（エリアサーチプログラム）には何も引っかかりませんよ」
桃花は左目だけ閉じて行使術式（プログラム）の情報を解析するが、特に怪しい人影や組織だって動いている連中はいない。もし、これで見つかるような連中ならばとっくの昔に検挙されているであろうし、桃花たちが動くこともなかっただろう。抑止力、というのは戦力に余裕がある者が行う手段であって、今の日本がそれを行うにはさすがに…。
「あちらさんだって隠れるのに必死だろうよ。それにあそこに居る可能性があるだけであって、確実にクロでもない」
秋雨は客観的に述べているつもりなのだろうが、やはり心のどこかでこんなことをしている暇はないと言外に言っているようで、顔を顰めていた。
実際、廃棄都市（スラム）には所々で何かを燃やしているのか、焚き火のような赤い炎が上がっているだけで特に街としては静かな方だった。
「強制介入はしない方針ですよね？」
「日本警察様は穏便だからな。魔法省（ＪＰＭ）と違って手荒なことはしたがらない。ただでさえ日本は非武装地域なんだ。そこに武力介入したら政権が転覆する」
政治的な話だ。と桃花はとりあえず納得しておく。魔法省（ＪＰＭ）は政治とは少し違う立場を取っているのだから政治に詳しくな

くてもかまわない。
「とは言え、私たちが強制介入すると私たちについて回る制限も厳しくなるだろうな。まぁ、心情的なもんだ。政治的にこちらを弾圧しようとすれば鳳凰院が日本に宝具（ディスク）を供給しなくなるから…」
秋雨の言うことも最もだ。日本は日本国内にエネルギーを供給している鳳凰院を軽んじてはいない。利権争いも一家が国家よりも強いという特色すら持っている。
「特別財団鳳凰院に勝てるところと言えば、昔は米帝くらいなもんだったが、米帝ですら最近は鳳凰院の言いなり」
桃花が呟くと秋雨が苦笑する。
「今回、魔法省（ＪＰＭ）の暗殺命令に鳳凰院家の人間がリストアップされて、それを抑えたのも、さくらさんだよ」
「そんなことがあったんですか」
強硬姿勢もそこまで来るとただの自殺志願者にも思えてくる。桃花は呆れると秋雨がくっくっと喉を鳴らした。
「優もさくらさんの養子なんだよ。知らなかったのかい？」
秋雨に言われて桃花が眉をひそめる。
「優くん、両親は健在だと言ってましたけど？」
「そりゃさくらさんのことだろ。まぁさくらさんは独身だけどな。あいつにとって両親っていうか親や身寄りはあの人だけってことだろ。プライバシーのことだから後は本人に聞いてくれ」
秋雨はこれ以上は話をするつもりはないと地上を見つめる。
ややこしいことになってきましたね。
桃花はそう思うと探査に影が映る。
「ブレイク」
桃花の言葉に秋雨が迎撃体勢を取る。
「陽動作戦ですかぁ？」
間の抜けたような声と天使のような微笑を浮かべてさくらが二人を見ている。いつ接近されたのかわからなかった。桃花は気づいたらそこにいたさくらを見て、頭を下げる。

「お疲れ様ぁ」
ぱたぱたと手を振って桃花に答えると、さくらは秋雨を見るや否や、頬を叩いた。
「学園へ戻りなさい。秋雨、緋村」
鋭い口調と目つきに変わった。日本魔法省（ＪＰＭ）の支配者としての面影と威圧。
「対象優に何者かが接触しようとしています。先ほど、優とプライベート通信中にノイズを感知しました。あなたたちがこんなところで何をしているかは知りませんが、警察省など放っておいてかまいません。最優先事項を履き違えないように。そして急ぎなさい」
さくらが光の矢のように学園へ飛翔していく。
秋雨は「申し訳ありません」と呟いて、それに続いた。
「さくらさん…」
桃花は唯一先輩として認める行使者（ユーザー）の毅然とした態度に驚いた。
男子寮を監視しているメルティアルは先日付けで日本自衛隊の教導へ出向いた。自分と秋雨がここにいる。学園が空で優は一人だ。
なぜそんなことも気づかなかったのか。
桃花はそう考えるとモバイルを取り出して優を呼び出す。学園へ向かう間に連絡がつけばまだ何とかできるかもしれない。
反応は…なかった。
何かが始まろうとしている。
桃花の中でもやもやとした感情が渦巻いた。
彼はもう、罪過を知る刻なのだろうか？
それともそれとは別の思惑が始まっているのだろうか…。
（ねぇ桃花ちゃん、優ちゃんと何かあったの？）
精神情報網（ネットワーク）からの強制介入（インターセプト）を受けて桃花は慌てて、自我防壁理論（フィアウォールロジック）の水準（レベル）を引き上げる。危うく自分の思考が全て相手のさくらに流出するところだった。
（勝手に回線に上位割り込み（ラインオーバライド）かけないでください）

（ごめんねぇ。優ちゃんがなんだか、あなたたちを超える訓練を受けたいって呟いてたのよ）
プライベートな会話、とはそのことなのだろうか。
桃花はふとそう考える。
（何かした、と言えばしたかもしれません）
C級行使者（コモンクラスユーザー）に対して特A級（エースクラス）の必殺フルコースをお見舞いしてぼこぼこにした挙句、殺し損ねました、とはさすがに言えなかった。保護者であり姉でもあるさくらがそんなことを身内にしたと知ったら、命がいくつあっても足りない。
（優ちゃんが特A級（エースクラス）を超える技術を身に着けたいって言ったの。まぁ悪いことではないんだけれどもね）
何か思案しているような物言いだが、それも理解できる。今、優にその技術を教えれば彼は確実に行使術式（プログラム）の分野では追従を許さない成長株になるだろう。が、精神的に危険な狂人になりかねない。
（男の子って腕力とか力で女の子に負けるの嫌う遺伝子（性格）を持ってるみたいなのよね。まぁ、今の世の中、どこも女の子だらけだからなおさらねぇ）
なるほど、とは思う。
確かに男の子であるということはそれだけで珍しい。
（実は気づいてるんでしょ？自分より強い人が優ちゃんだって）
苛々する。
絶対にそれは認めたくなかった。
（どういうことですか？）
思わず心が乱れた。
（気付かない振りするの、やめようね？）
さくらはそう言うと、桃花は強制的に回線を切断する。

学園　非常階段
優を抱えた悟は目の前の少女の背中をじっと見つめていた。

宝具(ディスク)を装着した自動拳銃を片手にしている学園の制服を着た少女が男子寮の優の部屋で発砲し、悟と同時に外へ出たところだ。
優は完全に気を失っている。微小機械治療(ナノマシン)が最高潮(ピーク)に達して強制的な睡眠を強いられている優は完全に無防備な状態でもあった。そこに来て、銃声、発砲、交戦と来れば悟でなくても驚いたはずだ。
「そっちの子、生きてる？」
「死んだように眠ってるぜ」
尋ねられて答えると、少女は「こんなときにも冷静なのね」と苦笑して、一階から周囲の闇に目を凝らした。
ドンッ！
茂みに向かって発砲すると、茂みが動いて何かが飛び出して逃げていく。
「君の名前は？」
「俺は悟っす」
「あぁ、さくらさんの」
さくらの実弟であることを確認して少女はなるほど、と呟く。
「私は三年の沢樹沙織、よろしく」
いかにも神経質そうな戦闘少女は端正な顔で周囲を見回しては警戒している。
「よろしくっす」
悟はそう言うと自分の法具(ディスク)を部屋に置いてきてしまったことを後悔した。持っているのは整備工具とポータブルデバイスのみで、さすがにこれで殴る程度では行使者(ユーザー)には勝てるわけもない。
「私がどうして男子寮にいるのか、とかさ…」
「襲ってきた連中は何者なのか？って聞かないといけないっすか？」
悟が言葉を奪うと、沙織は頷いた。
「普通の人はそういうこと尋ねるものよ」
「礼儀がなってない後輩なもんでね」
悟は冗談交じりに言うと、黒塗りのセダンがものすごい勢いで突っ込んでくる。

目の前で止まると沙織が運転席の後ろのドアを開き、そこに乗り込む。悟は優を頭から車に押し込むと沙織が引っ張りいれて、そのまま優を引っ張った。悟は優の足を抱えてそのまま車に乗り込んでドアを閉めると車が急加速した。
「あなた誘拐のプロになれそうね」
「仕事の相棒（パートナー）はあんたで決まりだな」
悟はため息を吐くと、沙織が「失礼」と狭い車内で身をくねらせて助手席に移動する。
「きれいなおみ足で」
短いスカートからいろいろ見えた気がする。
悟は運がいいのか、こんな状況に巻き込まれて運が悪いのか考えると沙織が苦笑した。
「手伝ってくれたサービスってことで」
「最上級のサービスだ」
悟は優に怪我がないかデバイスで走査するが、特に問題はなさそうだった。
「微小機械（ナノマシン）治療中でね。本来、こんなふうにしたら危ないんだ」
「大変だね～」
元気のいい声を聞いて悟はルームミラーに目をやると、いかにも活発そうな少女がにこにこと笑ってハンドルを握っている。今時、車を手動操作すること自体が珍しいのに、学園（アカデミー）の制服を着ているところを見ると、彼女も三年らしい。
「君は誰だい？」
野生の獣のようなぎらぎら光る瞳が印象的な少女に尋ねられて、悟は自分の名前を口にする。
「大変だったねぇ、アタシは…」
名乗ろうとした少女は舌打ちすると速度制限を無視するためにアクセルをべったりと踏み込み、ギアを素早くチェンジさせていく。悟は後ろを見ると黒のセダンが二台追走していた。
車は国道に出てしまっているため、速度を上げれば自然と他の車

を追い越す形になる。
「アタシは…ちょお、どけー」
ハンドルが左右に振られると悟の頭も左右に振られる。
「アタシの名前はっ！」
ブレーキと同時に赤信号を通過しつつ、輸送無人トラック群の間を縫って車線に復活した。
「この人は生徒会副会長の神山ユウ。片仮名でユウって書くの。そっちの子と同じ名前」
「変わってる表記だろー」
沙織に紹介されて、ユウは「うわははは」と笑っている。
新手の速度中毒者（スピードジャンキー）なのか、と悟はそのテンションの高さに唖然とする。
時速百八十キロ近くの車の中で左右に揺れる車。悟は優を押さえながら目が回りそうだった。
血圧が上がる…。
今自分の心拍数を測ったら面白い結果が出そうだ、などと頭の隅で思いついたが、車が接触しそうになるたびに体が強張った。
「失礼、空気の入れ替えでもしますか」
沙織が窓を開いた。気づけば学園都市郊外まで出てきていて、車の数も減った。
窓から身を乗り出して、沙織が助手席のヘッドギアに足を絡ませて、完全に上体を車の外に出して腹筋だけで体を支え、後ろに向かって銃を構えると、後ろの車二台も腕を出して銃口をこちらに向けていた。
ユウが車を真っ直ぐに走らせた瞬間、沙織が発砲すると追走していた車のタイヤに正確無比な一撃を叩き込む。百八十キロで走行する車のタイヤが破裂したとなれば、蛇行して事故を起こしてしまう。
案の定、車は横向になってガードレールにぶつかって、その後ろを走っていた車がそれに突っ込んで追走者が小さくなっていく。
沙織が素早く車内に身を引っ込めると同時に、ドン！っと何かが

落ちてきた音が聞こえた。
「乗車したいお客様が…」
悟が天上を指差すと、ユウがぽかんと口を開けて天井を見上げる。
「乱暴なお客様だのー」
ユウはため息を吐くとハンドルを乱暴に左右に振る。思いついた方向にハンドルを曲げて蛇行しても何かが地面に落ちたような気配はない。
「乗車拒否してー」
「耳」
ユウに言われて沙織が警告。ユウは左手で耳を押さえると発砲。
悟は耳鳴りがひどかったが後ろを見ると道路上をボールのように人が跳ねていた。
「ありゃ死んだか？」
「だといいけれど」
沙織がさらりと呟くと、ユウは「あははー」と笑っている。
追走する車の中に行使者（ユーザー）が混ざっていたのだろう。そして車を乗り換えるにしても少しやり方が強引すぎた、からと言って車内から撃たれたというのはあまりにも酷な話だ、と悟は思った。
「時速百キロを超える車を飛び移って、乗せてくださいって言われてもね。ノックしたみたいだけど面倒だから降りてもらったの」
「迷惑だしねー」
沙織にユウが答えると、悟は過激だこと、とつぶやく。
「んでセンパイ方はどうして優が危ないって気付いたんすか？」
「会長の命令。優くんが学園（アカデミー）に来てから多少人事異動があったし、まぁ結論から見た推測だから人事異動を調べてたら優くんの周囲が異様にガードが固かったっていうだけの話なんだけど、何かあるとは思うでしょ」
沙織に説明されて悟はなるほど、と思う。内部事情に詳しいものなら誰でも疑問を持つだろうが、そこまで思考を巡らせているとするならば会長、とは頭の回転の早い人物なのだろう。

沙織が説明した内容は…。特A級行使者（エースクラスユーザー）、秋雨京の一年二組赴任とアフターファイブBクラスの担当。同級特A級行使者（エースクラスユーザー）であるメルティアル・ヴァンホーテンの男子寮着任。アフターファイブBクラスに同級特A行使者（エースユーザー）、緋村桃花が基本教育課程のアフターファイブに参加するとなれば、男子の黒沢優に何かがあると考えるのも自然だった。

「その子、特別なのか何なのか知らないけれど、最近学園（アカデミー）に覗き屋（ハッカー）が増えたのも事実なのよ。とりあえず、学園の生徒は会長の所有物みたいな考えだから、会長も放っておけなかったところよ」

「会長って傲慢なんだか、気配りが利いてるんだか、わからない人ですね」

悟が首を傾げると沙織は苦笑した。

「たぶんどっちも正解」

「会長はすげーんだぜー」

ユウが呟くと、ぐるりと学園都市を二周した車が女子寮に入った。

「女子の寮って車が入るんですね」

大型マンションのような地下駐車場に入って悟は男子寮との違いに驚いた。

「女子のほうが世界的に見ても人口が多いし、学園だって女の子ばっかりでしょ」

「ですね」

行使者（ユーザー）人口は女子が大多数を占めるのだから、学園（アカデミー）も結果的に女子が多くなるのも無理はない。

「たぶんここの子たちはあまり男子と面識ないから、失礼なことしちゃうかもだけど、その点はカンベンしてあげてね」

「セクハラは受けなれてますから…」

学園でのことを思い出して悟がうんざりとする。こっちがドキドキしてしまうようなことも多々あるし、セクハラは男子から女子ではなくて、今や逆の意味のほうが強い。

車が完全に停車するとドアが全て制服を着た女子たちに開けられ

る。
「お帰りなさい、副会長、沙織さん」
制服の袖に赤いリボンをつけた少女がユウと沙織に挨拶する。たぶん偉い人に当たる人物なのだろう。
「悟様も足元にお気をつけください。優様はこちらの二人が運びますので」
後ろに控えている少女が反対側のドアに回って優を引っ張って外に出す。
「二人を客室に運べい。ドアは四人で固めることー。っとB級行使者（バスタークラスユーザー）は八時間で交代だぞ？あとはー上空警護の人間は私についてくるんだっ」
ユウが声を張り上げるとてきぱきと少女たちが動き始める。
「後は沙織に任せるぜ？」
「了解、私はこの二人を会長に完全に引き渡すまで警護を続行しますよ」
沙織が返事をすると「まかせたぜー」とユウが走って通路に消えていく。
悟と優は最上階の客室に招かれると、優を抱えた少女が大事そうに優をベッドに寝かせると、敬礼をして部屋の外に出て行く。
テーブルを挟んで沙織と悟が向かい合って座る。男子寮の一室の三倍ほどは広いであろうホテルのスイートのような部屋で、優が寝ているベッドもダブルのキングサイズほどの大きさはあるだろう。
「あれは？」
壁掛けのディスプレイを指差すと「ＣＯＤＥ：Ｃ３０２０」と表示されていた。
「コード、Ｃサンマルフタマル。緊急度はＡＢＣで表記されて脅威レベルはさらに細かくて、三千番台は脅威に対しての対応水準。十番台は待機レベルでスクランブル命令があった場合、六百秒以内に出撃できる準備をしておく、っていうことね。まぁ色々決まっているの」

「軍隊みたいっすね」
悟はそこまで学園がきっちりとした規則を持っていることは知らなかった。
「男子は希少種族(レッドアニマル)だからね。死なれたら種の保存に関わるの。学園(アカデミー)では女子が前線に立つでしょ。私たちは基本的に行使者だから軍事教練もしっかり受けてるの」
沙織は銃の入ったホルスターを外してテーブルの上に置く。
「アフターファイブ以外の生徒もしっかりと放課後(アフター)、残ってるの知らない？」
「俺バイトしてましたからね。学園(アカデミー)に残ることのほうが珍しいんで」
気付かなかったと悟が呟く。戦場は日常のすぐ側にあったなんて、誰が気付くだろうか。
「悟くん、私の身体見てくれない？」
沙織は精神情報網(ネットワーク)にアクセスして悟の情報を呼び出して、ちょうどいい、とブレザーを脱いでブラウスのボタンを外していく。
「え？」
悟は突然、脱ぎだした沙織に狼狽した。
沙織は立ち上がって悟に背を向けると、器用に下着まで片手で外してブラウスで前面を隠して振り向いた。
ごくり、と悟が唾を飲み込む。
「ん？」
静かな部屋に聞こえる、微かな機械的な作動音に悟は目を細める。
「私、半身不随で左側を機械化肢体(ギミック)に換装しているのよ。あなた、機械化肢体(ギミック)の整備士免許(リペアライセンス)持ってるわよね？」
「ええ、一応一級の整備士免許(マスターライセンス)持ってますよ」
悟が頷くとブレザーのポケットから簡易調整キットを取り出す。
沙織は悟の隣に座ると背を向ける。
「どこが悪いか自覚症状出てます？」
悟はポータブルデバイスを左手に持って、走査モードで透過レーザーを沙織の背中に当てる。

「どうも…反応が悪いのよね。思った瞬間に身体が動かないのよ」
「失礼しますね」
悟は沙織の耳の後ろを触って、デバイスからケーブルを引っ張って耳の後ろにあるジャックにコードを差し込む。
「あっ」
官能的な声を出されて悟は苦笑した。情報がしっかりと相互に行き交っているのを確認して、右手で左と右の肩に交互に触れる。
「ペンか何かあります？」
「テーブルの上にない？」
悟は視線をテーブルに向けるとボールペンが転がっていた。ちょうどいい具合に真鍮で出来ている。これを利用しようと悟はひんやりとしたそれを沙織の肩に当てる。
「ひぅ！？」
冷たいものを当てられて沙織が驚いた。左右交互にそれを当てて、悟はペンを置いた。
「変な声出さないでくださいよ。自制心が持ちませんって」
悟が苦笑いすると、沙織は照れるわけでもなかった。
「こんな身体でも私をオンナとして見れるの？」
不意に尋ねられて、悟は機械化肢体（ギミック）に換装した人の心理的劣等感を目の当たりにして、言葉を逸した。
「俺は行使者（ユーザー）とか機械化肢体（ギミック）とか別に関係ないと思ってますよ。そこに精神（こころ）があって、意思があるのなら、俺は人間だから一緒だと思ってるんです」
悟はデバイスの透過キーボードを叩く。
「君は優しいんだね」
「優しいとかそうじゃないとかじゃなくて、俺は人間として優しくありたいって思ってるんです。本当はみんな優しいんでしょうし、優しくないかもしれない。結局は優しい人でありたいって思うから、優しくなれるんじゃないでしょうか？」
「私にはわからないわ。それこそその人の考え方一つでどうにでも

なりそう」
「どうにでもなれるってことは、優しくなれるってことです」
悟は作業を終了されてジャックからコードを引き抜く。
「沙織さんは戦闘とかするときに、痛覚神経を最小限に設定してますね？」
「そうね、痛いのは嫌じゃない。機械の部分だけでも痛みを簡略化できるならそうするでしょ？」
悟はなるほど、と呟く。
「その時、言っちゃなんですけど、生身の部分と機械の部分の電気信号が錯綜しちゃってるんですよ。同じ痛みなのに信号の強度が違うわけですから、人間の部分の脳が混乱するんです」
「へぇ…わからないわ」
だろうね、と悟は苦笑する。
「まぁそれ、軍用肢体（ミリタリースペック）じゃないんで、本当はそういう事できるわけじゃないんです。ソフトウェアから強引に信号強弱度を受け取るシナプスに影響を与えているから、ナノソフト的な干渉が」
「わかるようにしてくれない？」
沙織は苛々しているのか、声を荒げた。
「まぁ運動させようとする電気信号まで干渉しちゃってて、コンマ三秒ほど機械化（ギミック）肢体のほうに送信する電気信号が遅れちゃってるんですよ。それが微妙な差になって違和感を通達しているんだと思います」
「どうにかならない？」
「しました」
悟がさらりと言うと、沙織は服を着て立ち上がり、左肩と右肩を交互に動かす。確かに楽になったような気がした。
今まで何度か医務室に行ったがあまりよくならなかったのに、悟の作業の早さに沙織は驚いた。
「ありがと」
「どういたしまして」

沙織はテーブルを挟んで反対側のソファに座ると、部屋に来たときと同じように向かい合う。
「本当はもっと道具とかがあれば、手首の衝撃を緩衝させることもできるんですがね。通常設定は生活水準に設定されてますから、拳銃に法具（ディスク）を装備させているんですから反動制御ももっとうまくできるはずなんですよ。でも緩衝水準を上げると整備に時間がかかりますね。換装時期も早くなっちゃいますから…」
「ふふ」
悟が得意げに話を始めて、沙織は思わず笑ってしまった。
瞳をキラキラと輝かせて、まるで子供が母親に対して自分の自慢話をしているような悟が純粋な少年のように見えた。
「あ、すみません。宝具（ディスク）とか機械化（ギミック）肢体とかのことになると夢中になっちゃってですね…。つい」
恥ずかしそうに悟が頭を掻いた。
「別に構わないけど、君みたいな行使術式（プログラム）を使える行使者（ユーザー）でもないのに、どうして学園（アカデミー）に入学できたのかようやく理解できたのよ」
「宝具（ディスク）の扱いは行使者（ユーザー）と同じくらい自信がありますし」
「そうだね。君の武器はそれだね。人間として法具（ディスク）を扱う技術がものすごいのね」
悟は褒められて苦笑した。
「俺はですね、人間も行使者（ユーザー）も機械化（ギミック）肢体に換装した人も、分かり合えると思うんです。分け隔てなく受け入れる人間を理解者、なんて呼び方してますけど、きっと誰もが理解者なんだと思うんですよ」
「それは…とても素晴らしい考えですわね」
いつの間にか入り口に少女が立っていて、沙織が慌てて立ち上がり敬礼する。
「お座りになって？」
しゃなり、しゃなり、と優雅に少女が近付いてくる。言われて沙織は悟の隣に回って座ると、沙織が先ほどまで座っていたソファに少女が腰掛ける。

勝気な瞳をした三年生。恐らくこの人が生徒会長と呼ばれる人だろう。確かに責任感はありそうな印象を受けた。
「砂山悟、くん？」
「ういっす」
悟が返事をすると少女はゆっくりと頷いた。
「私は倉山結衣と申します。不肖、私が学園生徒会長（アカデミー）を勤めさせていただいており、鳳凰院家様のご子息のご尊顔を…」
「結衣さん社交辞令って学園の教育プログラムに含まれてるんですか？」
わざとらし過ぎる言い回しに悟が言葉を遮ると、結衣の態度が豹変した。
「死ね」
「うぉ！？」
突然の言われように悟が仰け反って驚く。
舌打ちした結衣はどがんっとテーブルにブーツの踵を押し付けて足を組んだ。
「うぜぇ、ちくしょう。なんだこの事態は。上からは優のことやお前のことは知らされてなかったんだ。鳳凰院ってのは厄介な連中だ」
「結衣さん、そんな言い方はだめですよ」
沙織が困ったように笑うと結衣は大げさにため息を吐いた。
「今日は突然、メルティさんと京の姐さんに、桃花の奴が学園周辺にいない。そんなのバレたら狙われるに決まってんだろ。上はバカなのか？それとも底抜けに間抜けなのか？おい、どう思うよ」
「それはもう聞きました」
悟は萎縮して答えると結衣は「そうか」とまた舌打ちした。これが学園トップの行使者（ユーザー）全員を束ねるものとはとても思えない。
「どうして俺たちを助けてくれたんですか？」
「あん？」
じとり、と睨まれて、悟は聞いてはいけないことを聞いたのか？とびくびくする。

「学園の生徒がわけもわからん連中に攻撃されて、しかも行使者(ユーザー)を奪われたなんて体裁に関わるだろうが。日本の学園(アカデミー)は行使者(ユーザー)の精鋭(エリート)なんだよ。そんな汚名を指揮官である私が浴びるのは許されないだろう？わかるか？」
「は…はい」
沙織の言葉を思い出して、そういうことか、と悟は納得した。この人は傲慢であり、優しい人でもあるのだろう。
「学園(アカデミー)の生徒は私の所有物だ。それを勝手に持ち出してどうこうしようなんて、許すか？許さないよ」
ふっふっふっと不気味に笑う結衣。
横暴に次ぐ横暴だが彼女は彼女なりに必死に動いたのだろう。
「報告を聞いた」
「はぁ」
次は何を言われるのか、学園の教師に何かを言われるより怖いと悟は正直にそう思った。
「黒沢優が奪われそうになった数分間、お前が戦闘をしたんだな？」
「戦闘っていうか、優を引っ張って外に連れ出そうとしただけっす」
「それでもお前がいなかったら敵は易々と優を奪取していただろうな。礼を言う」
テーブルの上に乗せられた足を見て、悟は礼を言う態度ではないな、と思う。
「お？」
ブーツに取り付けられている法具(ディスク)を見て、悟は事もあろうか足を引っ掴んで持ち上げる。
「なっ！？」
結衣は慌ててスカートを押さえて慌てふためく。
「これ、壊れてますね」
「見ただけでわかるの？」
沙織が尋ねると悟は頷いた。
「ええ」

悟はふと射抜くような視線を向けられていることに気付いて結衣の顔を見る。
「お前も壊すか？壊れてみるか？」
「す…すんません」
足をそっと爆発物を扱うように、テーブルに戻すと結衣が米神を押さえた。
「お前はそういうのに詳しいのか？」
「いちおー」
死刑宣告はまだか？と悟が返事をすると結衣はふむ、と瞬間的に思考するとポンと手を叩いた。
「私の肢体と言い、宝具（ディスク）といい、すごいじゃない」
沙織が感嘆すると結衣がにやりと笑った。
「技術って奴は使って初めて真価を問われるんだ」
「はい？」
結衣の邪悪な笑みに悟は顔を引き攣らせる。

学園、男子寮。
さくら、秋雨、桃花は空になっている優の部屋に到着して現場検証を始めていた。
「折衝があったみたいですね」
「小競り合い程度かな？」
桃花にさくらが同意する。他の男子生徒たちは何事かとすでに野次馬になっていたが秋雨がそれらを追っ払っていた。
「問題なのはどうやってここまで侵入して、そうやって優くんを運び出したのか、なんですけど。目撃者がいないんですよ」
さくらは拳銃を取り出して、窓を開けると無造作に撃った。ばいんっと薄いプラスティクを指で弾いた様な音がして弾丸が無力化されて床に転がる。
「封殺（シール）は完璧ですか」

「対物理はね」
さくらがふと桃花を見ると、桃花が空に向かって手を伸ばしていた。
「こわすなよー？」
部屋の入り口から秋雨がにやにやと桃花を眺めていた。
「行使術式（プログラム）…起動準備（スタンバイレディ）。圧縮情報展開（アーカイヴエクステンド）、不必要情報排斥（キャッシュメモリダンプ）…」
「桃花ちゃん？危ない等級（クラス）の行使術式（プログラム）はだめだよ？」
と言いながらさくらと秋雨は自分自身に保護行使術式（ガードプログラム）を展開させる。桃花を中心に膨大な行使術式（ランベクトル）方向が集約されていく。高まっていくそれがビリビリと大気を振動させていた。
私より、優くんのほうが強いなんて、認めたくないよ。
ずっと考えていたことだった。
「私が優くんを守ってみせるんですっ！」
誰に言った言葉でもなかった。ただそうあることが望みだった。
臨海に達した桃花の行使術式（ランベクトル）方向があふれ出そうになる。開放を待ち望んで桃花の中で暴風雨のように暴れていた。
「鋭敏なる刃（シャープネスウェッジ）！」
桃花が腕を掲げて振り下ろすと、桃花の身長ほどある刃が窓枠ごとぶち破って封殺（シール）に当たると光と音、そして電流を迸らせる。
「うあああああっ！つらぬけええええっ！」
桃花がそう叫ぶと封殺壁にびしり、と皹が入った。
続いて秋雨がごすっと桃花の頭に手刀を叩き込む。
「えう」
桃花が頭を抱えると鋭敏なる刃（シャープネスウェッジ）が解除される。
「貫いてどうするよ」
桃花は両手で頭を押さえて瞳に涙を貯めて秋雨を上目遣いで睨みつける。
「痛いじゃないですか」
「そうかそうか」
秋雨は皹を見ると、自動修復（オートリカバリー）されて元に戻った。

「まぁ…特A級（エースクラス）の行使者（ユーザー）が攻撃しても簡単には破れないってことですかね」
さくらが苦笑すると、秋雨は安心したのか胸を撫で下ろしている。
秋雨は内心、寮ごと桃花につぶされるのではないか、と冷や冷やしていたのだ。
「進入経路の特定は難しいですけど、優ちゃんは逃走したのかしら」
「さくら隊長、サイフがあそこに」
机の上に放置されたそれを指差して桃花が報告すると、さくらはきょとんとする。
「隊長、だなんて懐かしい呼び方してくれるのね。まぁ、お財布があそこにあるんじゃ学園都市からも出られないでしょうし、ねぇ」
学園都市に入るには許可証がいるし、出るにも同じ許可証が必要で、大抵はサイフの中にそれを携帯しているものだ。さくらは財布を手にして中身を確認すると許可証がそこに入っている。
古びた写真を見つけて、はっとする。
自分、悟と車椅子に座っている優に、そしてもう一人の女性が写っている写真。
これは何年前の写真だったか。優と悟が小学校に上がる前の写真だったはずだ。
「どうしました？」
秋雨が尋ねてさくらは写真を財布の中に戻す。
「さくらさん、優くんは目立つ瞳の色をしているから狙われていると知って不用意に出歩いたりはしないと思います。目立ちすぎますからね」
半分正解の桃花の発言にさくらは頷く。
「レイシアは優ちゃんが保有してるのよね？呼び出せる？」
「はい！」
桃花が優に渡した法具（ディスク）に精神情報網（ネットワーク）経由で呼びかける。
完全に優にレイシアを渡していたことを失念していた。機転が利くさくららしい発想だった。

さくら、秋雨、桃花は行使術式（プログラム）、飛翔（フライハイ）を起動準備（スタンバイ）して待機する。レイシアと接続（リンク）できれば直にでも場所が判明する。ある意味、時間の問題でもあった。こちらが向こうの場所を感知したことを逆探知されてしまえば、優は完全に違う場所に運ばれてしまうかもしれない。レイシアを放棄して優に対して強力な封殺（シール）をかけてしまえば追う手がかりは完全に失われてしまう。それだけは回避しなければならない。

「桃花」

秋雨が黙り込んでいる桃花を急かすと、桃花が俯いて首を横に振る。

「反応、ありません。優くんは…通信可能な状態にいないものと判断します」

「くそっ」

桃花が泣きそうな顔をして、秋雨が悔しそうに歯噛みする。

「面白い情報があるのだけれど」

さくらが精神情報網（ネットワーク）を介して桃花と秋雨に情報を送信してくる。受信した二人がその内容を見て、気付いた。

「Ｎシステムの情報履歴ですね」

「本当ですね。黒のセダンが国道を時速百四十キロで走ってる」

秋雨と桃花が情報を解析する。

「逃走車両は一台で、追走車両が二台」

「その後、追走している車が横転してもう一台がそれに突っ込んでるんですよ」

秋雨にさくらが情報を照合する。

「運輸省の情報と照合しました。逃走車両は学園（アカデミー）所有」

桃花が報告する。

「前に座ってる二人は学園（アカデミー）の生徒みたいね。あら、三年生だわ」

画像を拡大、鮮明化処理してさくらが「おてんばさん」と呟く。

「私も魔法省（ＪＰＭ）のデータベースと照合した。行使者（ユーザー）データにあった。一人はＢ級行使者（バスタークラスユーザー）、三年の沢樹沙織。医療（メディック）データに機械（ギ）

化肢体手術を六年前に受けている。もう一人は同じくB級行使者（バスタークラスユーザー）の神山ユウ」
秋雨から情報を受け取って桃花が学園のデータベースにアクセスする。
「二人とも生徒会所属です」
「後部座席に優ちゃんと悟ちゃんを見つけたわ」
さくらが安心したのか胸を撫で下ろす。
生徒会が優たちを無事に保護しているであろう、と分かれば急ぐ必要はない。
「Nシステムによるとユウさんの運転する車両は一時間かけて学園都市を二週していますね」
「対追跡者（チェイサー）の行動でしょうねぇ。よく訓練されていますこと」
さくらがそんな教練までさせているのか、と呆れる半分、必要なのだろうと悲しくなった。
「行き先は…学園女子寮だな」
秋雨は車両の行き先を特定して完全に三人は脱力した。
「結衣には連絡をしっかり入れるように言い聞かせないと」
「ですね。まぁ学園生徒（アカデミー）たちには連絡が行ってるでしょうね。私たちはある意味、学園とは部外者に位置しますから、必要な情報交換の範囲内にいないということでしょう」
歯噛みする秋雨にさくらが考えを伝える。
「あそこにいるなら安全です」
桃花は学園女子寮を思い浮かべて、心の底からそう思った。
あそこは生半可な要塞ではない。迂闊に攻撃しようものなら四百名を超える行使者（ユーザー）が反撃を行うだろうし、防衛システムも完備されている。日本で一番安全な場所は国会議事堂でも首相官邸でも、皇居でもない。他の追随を許すことなく学園女子寮だった。
「生徒会が動いたということは結衣の指示だな。よく動いてくれた」
秋雨は結衣を再評価する。教師たちとは何だかんだと仲たがいを引き起こしてはいるものの、行動力や判断力は指揮官として申し分

ないものがある。
「結衣さんってすごい人なんですか？」
桃花がいまいちわからない、と呟く。桃花のように世界中を飛び回って積極的に作戦に参加しない結衣のことは桃花の耳には余りその名前が届くことはない。
「去年の修学旅行でフランスに行ったんだ。その時、フランスで日本大使館が襲撃された。テロリストが篭城をして何だかんだごねてる所に結衣が単独潜入して二十八人のテロリストを完全無力化した。篭城してから十二分の出来事だよ」
被害者はゼロだ。と秋雨が付け加える。
「…あれ、結衣さんがやったんですか。日本人一名が無謀とも果敢とも取れる行動を起こして無事解決したって言われてましたが」
桃花が苦笑すると、さくらも苦笑する。神風撫子とか新聞に載っていたはずだ。
「あの事件は解決まで最短記録（レコードタイム）を持ってるわよね。私も鼻が高いわ。教え子が優秀だと」
じろり、とさくらが「優秀である教え子が優ちゃんの警護を怠るなんて信じられない」と言いたさそうに桃花と秋雨を流し目で見る。
桃花と秋雨はそれぞれ視線を泳がせて別の方角を見ると、さくらはため息を吐いた。
「とりあえず、女子寮へ移動しましょう」
窓から三人が飛び出すと、ようやく人心地つける気分になれた。

悟はテーブルの上に置かれた法具の山と入れ替わり入って来る女子たちの機械化肢体（ギミック）を調整してはうんざりしていた。とりあえず、女子生徒の調整はある程度終わったし、作戦中なので後回しにすることにして、法具（ディスク）の山を片付けに入る。
「お前もよくやるな」
優が感心すると、悟は「あー」と呟く。

ここまでの経緯を簡単に説明されたが、被害者である当の本人は眠っていたので実感がないらしい。
ポータブルデバイスを片手に悟は忙しそうに様々な法具(ディスク)を調整しては、行使術式(プログラム)の高速化(スピードアップ)処理を行っていく。
「まぁ経緯はわかったんだけどよ。なんでお前はそんなことしてるんだ」
「会長の命令だよ。助けてやった礼はしても罰は当たらないらしい」
結衣が言うにはそんだけの技術があるならば、学園(アカデミー)の専属整備士(リペアラー)になればいい、金は払う。バイトもしなくていいだろう、とのことだ。
その山を見つめて、優は顔を引き攣らせる。
様々な武器の形態をしていたり、球体だったりする法具(ディスク)の山はざっと見ただけでも十個や二十個ではすまない。
「が、がんばれよ」
「おう」
優が再びゴロンと横になる。微小機械(ナノマシン)の反作用は簡単には抜けないはずで、それを知っているから文句も言えない。怪我人は怪我人らしく大人しくしていて貰った方が悟も安心できた。
「お前は友達が作業していても眠れるのか。たいした友人を持ったものだな、悟も」
うとうとし掛けて声をかけられる。
優は目を開くとそこには結衣が仁王立ちで立っていた。
「誰だお前」
優が上半身を起こして結衣を睨みつける。
「噂の生徒会長だよ。助けるように指示してくれた人」
悟は手を休めることなく優に知らせると、優は「あー」と寝ぼけた頭で結衣の顔を見上げた。
「どもっす。あっした。おやすみ」
優がごろんと横になる。ぷちっと何かが切れるような音がした気がする。

「てめ、コラ、起きんかワレ」
結衣が優の襟首を掴んで無理やり上半身を引っ張り上げて頭を前後に揺らす。
「ヴぁー世界が揺れるぜぇ」
がくりがくりと首が千切れそうになる。
「やめんかい！」
優が腕を掴んで無理やり引き剥がすと結衣がふんっと鼻を鳴らす。
「一つ二つ質問に答えろ。優、貴様はなぜ狙われる」
「俺の行使術式（プログラム）の容量（キャパ）が人より多いからじゃないのか？大規模な法具（ディスク）を使わなくても俺一人（スタンドアロン）でそこらへんの兵器よりも数十倍の威力をひねり出せるだろうしな」
「そうか、それならいいがな。先ほど魔法省（ＪＰＭ）に問い合わせた処、お前の暗殺命令が出されていてな。それを桃花と京姐が指し止めている。これはどういうことだ？」
優も悟もそれは知っているので今更な話だった。
「それは知っているんだな」
結衣は当人たちがそれを知っているのか確認したかっただけなのだろう。それ以上は暗殺に関して尋ねない。
存外にバカではないらしい、と優も結衣を観察する。
「さくらさんや京姐、桃花がこちらに向かっている。お前の身柄を明け渡すがいいかな？」
別に反論することも意義を唱える意味もないので優が沈黙を保つ。余計なことを言えば結衣はそこを突いて来るだろうと優は何と無く直感で感じていた。
「俺もか？」
悟が手を止めて結衣に尋ねると結衣が頷いた。
「俺はこいつらを治してからがいいな。受けた以上仕事はきっちりやりたい主義なんだ」
「それは殊勝なことだな。そうか、この部屋はこれからお前の作業場にして構わん。診察と法具（ディスク）の修理をお前に任せるから自由に使え」

結衣はそう言うと悟は「うぃ」と右手を上げて作業を再開する。
正直な話、医者と整備士を一度に両方手に入れられたことはデメリットには絶対にならず、利用価値は十分にあると結衣はほくそ笑む。
「一流の道具はこちらで揃えて置くことにしよう。私は一流以外は認めん」
「一流の仕事をしてご覧に入れますよ」
悟はそれ以上口を開かずに集中し始める。
「専用デバイスではなくて汎用デバイスでよくやるものだ」
半ば呆れたように呟く結衣。
「到着したようだぞ」
周辺警備していた生徒から、さくら、秋雨、桃花の到着を知らされて結衣がドアのほうを向くと、ドアが開いた。
「お疲れ様です」
「ご苦労様です」
敬礼している結衣にさくらが答礼する。
「早速ですが、コードCサンマルフタマルを解除してくださいな」
「了解」
結衣はポータブルデバイスをブレザーのポケットから取り出す。
「全員、聞け」
寮内放送がオンラインになって、遠くで結衣の声が響いた。
「現時刻を持ってコードCサンマルフタマルを解除する。全員、通常活動を…」
「待ってくれっす！」
ユウの声がデバイスから響く。様子から察してただ事ではなく、ひどく慌てている。
「全員、解除は待て」
結衣は寮内放送からユウとの直通回線に切り替える。
「なんだ？」
「レーダーにアンノーン。行使者反応です！攻勢行使術式方向を確

認しました！」
「落ち着け」
結衣が静かに対応する。ここで慌ててはユウがもっと混乱する。対空レーダーをディスプレイに接続させて、外部カメラも同時に表示させる。
拡大処理させると最大望遠で人影が二つ。
「迎撃は任意だ。現場指揮官のお前に任せるぞ」
「了解しましたっす。任意で迎撃します。対空圏内に入った瞬間から集中砲火しますね」
ユウとの回線が切れると同時に別回線から通信。使用周波数帯域が学園の生徒たちが使用するものではない。ＳＰＹレーダーに表示されている二つの点はこちらの防空圏内ぎりぎりのところで、砲火がほぼ意味を成さない場所だ。
防空権ぎりぎり、という時点でなんとなく相手を察することができる。
先ほど、日本魔法省（ＪＰＭ）に優のことを報告したのが間違いだった。あそこは味方でもあり敵でもある。
「これから恐らく、防空権ぎりぎりで攻勢行使術式（アタックプログラム）を展開しようとしてる、くそったれなバカ野郎と話をする」
寮内放送で結衣が言い放つと、通信を外部と接続する。
「こちら学園（アカデミー）指揮官の結衣だ。通信帯に割り込んでいる意図を明確にせよ」
結衣がさくらを横目で見ながら応答する。さくらは身振りで桃花と秋雨に二人で屋上へ向かえと指示を出すと、桃花と秋雨が敬礼してから走って部屋から出て行く。
「こちら日本魔法省（ＪＰＭ）、特別攻勢部隊、鋼鉄の処女（アイアンメイデン）。黒沢優を引き取りに来た」
「これはこれは、殺戮部隊さんが、こんな夜遅くまでご苦労だ」
結衣はそう言うと一息置いた。
「断る」

断言してしばらく間が空いた。さくらもその意図に反論はないようで、何も言わずに目を閉じている。
「それでは強引な手段になるが、武力介入させていただく」
「まぁ待て、話をしようじゃないか」
結衣がすっ呆けた。
「無用」
「待てと言っている。こちらは鳳凰院さくらを始め、秋雨京、緋村桃花を現場配置している」
早口で通信が切られる前に結衣が相手にこちらの保有戦力を通達する。
Ｂｒ級行使者（ブレイカークラスユーザー）一名、特Ａ級行使者（エースクラスユーザー）は自分を含めて三名保有している、ということは通常一個連隊と同等の火力を保有している計算になる。加えてここは行使者のみで編成されている純行使者（ユーザー）連隊だ。もしその気になれば日本は無論、過去日本の掲げた思想である大東亜共栄圏を二日で達成するであろうと言われる火力を保有していた。
その戦力に対して武力介入だと？ふざけるな！そんなのは言葉の上でも脅しにもならんぞ！と結衣が邪悪な笑みを浮かべる。
結衣の判断は正しかった。
レーダーにあった反応が消える。形勢不利と見た相手が撤退してくれたのだ。
「申し訳ありません。さくらさんの名前を使うような真似をしてしまいました」
結衣がデバイスの通信を中断してさくらに謝罪すると、さくらは首を横に振る。
結衣は今度こそ警戒態勢を解除する指示を寮内に通達して、武装解除の指示を矢継ぎ早に飛ばしていく。
「考えてみたら、ここってすごい戦力スポットなんだな」
一種の緊張感の最高潮（ピーク）を抜けて、優が安堵のため息と同時に呟いた。先ほどの「話し合い」如何ではここが完全に戦場になるかもしれないのだ。優と言えども緊張する。

「そだよぉ、学園（アカデミー）の生徒会長は隊員とも言える全ての生徒の指揮官でもあるの。だから責任もあるし大変なのよね」
さくらが人事のように言うと、結衣は首を横に振る。
「私は確かに学園（アカデミー）の最高指揮官として自負していますが、さくらさんの指揮下にあることは忘れてはいません」
褒められて恥ずかしいのか、結衣が顔を赤くしてさくらに言うと、さくらは苦笑した。
「自分は星空を眺めている者を休ませますので、一度失礼します」
結衣は敬礼して颯爽と身を翻してデバイスを片手に部屋を出て行く。寮内放送では今回のコードCサンマルフタマルの経緯を説明して事態収束までの報告をする結衣の声が流れている。事態は収束したが、解決はしていないという結衣の声に優もそれは同意できた。
悟は釈然としない気持ちを抱えていた。
今回の戦闘という戦闘は、男子寮から女子寮の移動の間だけで、結局、優はどうして狙われているのか、などという重要なことは何一つわかっていない。最も根幹にある黒沢優の重要性という概念がすっぽり抜け落ちてしまっている。
さくらはレイシア…守護者（ガーディアン）を回収すると優に伝えると、優はそれをさくらに渡した。桃花はどこと無く寂しそうな顔をしている。
「とりあえず、これで一時事態は収束するものと思われます。今回はこちらの不手際で皆さんに迷惑をおかけしたということで報告します。今後は不手際が無いようにしますね」
さくらはそう言い残して女子寮から撤退した。

二章一節　潜在危惧

左右の瞳の色が違う。
それだけでとても目立つから、いつの間にか注目の的にされないように逃げるようになっていた。逃げる、というよりは見られていることに耐えられなかったから、なのだが…。
逃げるように辿り着いた屋上には、同じような少女がいた。
容姿もあるが、彼女は確かに人気者ではあった。
そう、自分とは規模が違う。
世界中からその動向を注目されている少女だ。
「神は人を見て嘲笑(わら)うのです」
歌うように少女が何かを口にしていた。
屋上のドアが開いて、桃花がこちらを見ると嬉しそうに微笑んだ。学園の制服に身を包んだ少女は一見すると、かわいい部類に属する普通の女生徒にも見える。
「よう、今日は早いな」
「優くんこそ」
桃花はまたフェンスに向き直る。
優をここで迎えてくれる桃花。いつの間にか桃花がここにいるのは普通になっていて、挨拶を交わすようになっていた。
「毎日来ますよね、ヒマなんですか？」
「お前だって毎日いるだろ？」
「任務がある日以外は」
そう言われて優は確かに居ないときもあるな、と思った。
「なんでお前はここに来てるんだ？」
予想はできたが、何と無く尋ねてみると、桃花はうーんと人差し指を顎の下に当てて悩む。
「何も無いから、ここに来るんですね」
相変わらず答えているのか答えていないのかわからないような返

事に優は安心した。いつもの桃花だ。約束したわけでもなく、互いがここにやって来る。それは変わらない日常の始まりを知らせてくれる。一瞬だけ垣間見た非日常は、つい三日前に起こった。だからこそ、この下らない毎日が優にとっては掛替えのないものだと知ることができた。

ふと桃花の横顔を盗み見ると、中学生に見えなくも無い可愛らしい横顔は何かを必至に見下ろしている。初めて会ったときは、同い年だと自己紹介を受けて優は驚いたものだった。

「優くん」

どこか遠くの世界に行っている様な瞳のまま呼ばれて、優は驚いた。

「何？」

桃花は身体の向きを変えて、フェンスに寄りかかるようにして体重を預けると、右足で床を蹴っ飛ばした。

「優くんは、もしこの世界がニセモノだったらどうしますか？」

相変わらず突拍子も無い質問に優はふと考える。

「うーん」

優もフェンスに背中を預けると、二人分の体重でフェンスがぎりしと鳴った。

「ニセモノってことは本物がどこかにあるんだろ？でもさ、俺はニセモノしか知らないから、やっぱりニセモノがホンモノになるんじゃないのか？」

比べられないんだ。比べるものを知らないんだ。

優はそう思うと、桃花が哀しそうに微笑む。

「そうです…よね」

何処か残念そうに言われて、優はふと悩んだ。

「もし…そのニセモノとホンモノを同時に知る機会があったら、ホンモノとニセモノ、どっちがいいんだろう」

取りとめも無く、答えもない話だ。

意味の無い会話。

そこに飛び込んでくる人影。
「優、てぇへんだ！」
悟が両手を膝について息を荒げながらも叫ぶ。
「どうしたハチ！」
「ハチって誰！？」
悟が叫ぶと優は「なんとなく、そんなキャラっぽいから」と呟くと桃花が苦笑する。
「敵ですか？」
「へい、隣の組の奴が！…っていや待って…日常で敵とか単語は出てこないで？」
悟が桃花に言うと、桃花が「残念です」と呟く。
「いやいや、敵がいないのが残念て、桃花さん、危険思想です」
優が突っ込むと悟が「もうやだ、この人たち」と涙を流す。
「で、この人は誰でしたっけ？」
桃花が悟を指差す。
「誰だっけ？」
優も悪乗りすると悟が優の襟首を掴む。
「お前よ…親戚で幼馴染で使える男ナンバーワンの俺を忘れたと？」
「はい」
桃花が頷くと、悟が手を離してよろける。
「ひどいよ、桃花ちゃん…」
「で、ハチさん、どうしたんです？」
桃花がさらりと受け流して尋ねる。
「ハチで固定ですか…じゃなくて…桃花ちゃんが乱入で転入生が探してる」
「典型的な間違え方は点数低いぜ。低い上に引くぞ」
優が呟くと悟は「ですよねー」と棒読みで答える。
「まぁ…教室にやって来るなり暴れてる女の子がいて、どうも桃花ちゃんを探してるらしいんだ」
「典型的な何か意図的に送り込まれてくる転入生、だな？お約束だ

ぜ」
優が桃花を横目で見ると桃花も苦笑する。
「それがよー、聞いてくれよー」
「きしょいぞ、喋り方」
悟が鼻の下を伸ばして言うのに優が顔を引き攣らせる。
「すごい美人さんだぜ」
「ほう？」
優が身を乗り出して興味を示す。
「こう…おっぱいもいい感じだ。でかすぎず小さすぎない。腰の辺りも程よく…」
悟が胸部の前で丸くボールを抱えるような仕草をして、次は腰をパンと手で弾く。
「ほうほう、それはエレクトだな」
「だっしょー？」
悟がにやりと笑うと、優の頬がむぎゅっと桃花によって抓られる。
「大きいのがそんなにっ！」
なぜか涙目になってる桃花に優はぎょっとする。
確かに桃花は控えめなほうだ。
「まー、桃花ちゃんの知り合いに美人な転入生って知り合いいる？」
悟に尋ねられて桃花が優の頬を両手で引っ張りながら首を傾げる。
「んー、美人さんでしたら一人知り合いがいますね」
「ほう」
悟が目を輝かせると、桃花はぱっと優から手を離す。
「優くんにとって、今日は忙しい日になるかもしれません」
「は？」
優は両手で赤くなった頬を手で摩りながら首を傾げる。
「っとそれどころじゃないんだよ！行使術式（プログラム）で暴れてるから止めてくれないか？」
「まじかー」
優がそんなじゃじゃ馬は願い下げだぜ、と呟くと悟が屋上から出

ようとした瞬間…。
「うぎゃあああああっ！？」
屋上を見事に後ろ周りしながら転がってフェンスに激突する悟。
「何だ？」
優が身構え、桃花が「ふぅ」と短く息を吐く。
勝気な瞳が銀色に輝き、すらっとした足を惜しげもなく晒しているスタイルのいい少女が仁王立ちになっている。
「も…桃花ぁっ！」
「うぉ…見えた！転入生の白！」
跳躍して桃花に飛び膝蹴りを入れようとした転入生の足が直前で軌道を修正して悟の顔面に直撃する。
「ぁー」
悟はそれでも立ち上がると、優の後ろに隠れる。
「隠れるなや」
「いてぇし、しょうがない」
何がどうしょうがないのかわからないが、取り合えず桃花に用があるらしいので優と悟はこっそりと隅に移動する。
「ある意味すげぇ光景だよな」
「ん？」
悟に言われて優は首を傾げる。
「可愛い系の桃花ちゃんと美人系の転入生。二人が並んでるんだ」
「あー」
確かに絵になる光景ではあった。
「黒沢優に関して話があるんだけど」
転入生が桃花を威圧するように言い放つと、優は他人の振りをしてそれを眺めている。
「おい」
「黙れ、俺は優など知らない」
白々しく言う優に悟は苦笑する。確かに教室で暴れたと聞いた少女が自分に関わっている、などと思いたくないのも理解できる。

「私にはないんだけれど？」
桃花が流し目で答えると、ぶちっと何かが切れた音が聞こえた。
だんっと床を蹴る転入生が空中で身体を捻るとバレリーナのように右足を桃花に向けて鋭く放った。桃花は真上に跳躍して三メートルほど飛んでそれを回避するとフェンスが歪んで遥か彼方に飛んでいく。
「蹴ったー…大きい…場外ほーむらーん…」
悟が人外の脚力に呆然とする。
「お前、さっき確実に蹴っ飛ばされてたのに、よく生きてたな」
「頑丈だけが取り得ですたい」
優もさすがに驚くと、悟が引き攣った笑みを浮かべている。
「お？」
桃花が両膝を畳んでそのまま自由落下して転入生の頭に乗るかと思いきや、転入生が寸での所で真後ろに跳躍すると、桃花が不自然なほど加速して床に膝を叩きつける。
ごぐんっ！っとくぐもった音がして床が凹む。桃花はすぐに立ち上がると転入生が右拳を突き出す。頭一個分、首を横に曲げると桃花の耳を掠めるようにしてそれが回避される。
速さで言えばボクサーの試合を見せられているようだった。
「桃ちゃんがピンクで転入生が白。紅白試合？」
「何が」
悟は言われて首を傾げると「あー」と納得する。
行使者（ユーザー）同士の戦闘、と言えば初めて見せられるものではあったが、優たちはどことなく二人を目で追えていた。
「え？」
「マジで？」
優が悟の前に立って行使術式（プログラム）・反射（リフレクト）を起動（ラン）する。
桃花と転入生が一定の距離をとったかと思うと、桃花が左手を、転入生が右手を相対する者に向けていた。
行使術式（プログラムベクトル）方向が収束する。

『射撃（シュート）！』

二人が同時に叫ぶと桃花から白い光が、転入生から淡い緑の閃光が放たれると中央でぶつかった。

「これは…まずいぜ」

優が校舎が振動して崩れるのを感知すると、壁を解除して二人の間に割ってはいると空に向かって両者の射撃（シュート）を弾き返す。突風をモロに食らって悟がフェンスに激突する。

「誰？」

二人の射撃（シュート）が同時に終息して、転入生が優を睨んだ。

全力の一撃を反射されて驚くのも無理はない。優は三日間もの間、寝る間も惜しんでさくらと桃花にみっちりと鍛えられているからそれくらいのことは可能でもあった。

「始めて会ったらまずは自己紹介…だったよね？桃ちゃん？」

優が始めて桃花に会ったときに言われた言葉を思い出して口にすると、桃花が苦笑する。

「おーい、いきてるぅ？」

フェンスに貼り付けになっている悟に声をかけると、悟が力なく貼り付けにされたまま右手を上げると、だらりと右腕が落ちた。

「死んだな」

優は両手を合わせて拝む。

「桃花、紹介してくれよ」

優が言うと桃花が頷いた。

「あの子は贖罪の風（リデンプションウィンド）の異名を持つ三森儚ちゃん。同い年のB級（バスタークラス）行使者（ユーザー）だよ」

「ほう」

優が頷くと、悟が回復して優の後ろでふむふむと頷いている。

何だか良く分からない単語も含まれていたような気がするが、桃花の天使旋律（エンジェリックコード）と同じようなものか、と理解する。

「あんたは何者なの？桃花と私の射撃（シュート）を同時に受け流すなんて、そこらへんの行使者（ユーザー）に出来るとは思えないんだけど？」

「俺は黒沢優、こいつはハチ」
優が親指で悟を指すと悟が残念そうな顔をする。
「俺はハチじゃな…」
「名前を聞きたいわけじゃないわ！貴方は何者なのかと聞いているの！」
悟の言葉を遮って儚が叫ぶと、優は困ったような顔をして桃花に助けを求める。
「俺から言わせてもらえば、お前がっと失礼。儚さんは何なの？行き成り喧嘩おっぱじめるなんて狂気の沙汰（クレイジー）だ」
その行動は聞いた話では教室で暴れて、目の前では悟を吹き飛ばして、桃花に殴りかかる。それはまともな人間のする行為ではない。
「アンタには関係ないだろ！」
なぜか指を指されて優は同じように桃花に助けを求めると、桃花はそっぽを向いている。
我関せず…これ極意なり…。
優は何と無く桃花がそんな感じに考えているような気がした。
「そ…そうか…わかったぞ！」
優が目を見開いて、なぞはすべてとけた！と言わんばかりに儚を見る。
「恋敵だったんだな！」
「なんでそーなる」
ぱかん、と悟が優の頭を叩く。
「な、何でそうなるわけ！？頭回転してる？動いてる？ねぇ？はいってますかー？」
こんこんと優は儚に頭を小突かれて「冗談なのに」と呟く。
顔を真っ赤にしている儚はなかなか弄り甲斐がありそうだなぁと優は苦笑する。
「頭は回転しないけど、首ならこの程度に動くぞ」
優は首をくりん、くりんと回して見せると儚がこれ以上は顔も赤くならないだろうというほど真っ赤になった。

「そういうこと言ってるんじゃねーわよっ！」
悟と優は可笑しくなって大笑いすると儚が肩を震わせる。
あんまり挑発するとお星様にされても知りませんよ…。
桃花はそう思うと、ぽんと儚の肩に手を置く。
「儚、久しぶりね」
「え？」
桃花の笑顔に毒気を抜かれて、儚がきょとんとする。
「この街はいいところだよ。住みやすいし」
「そう…？私はまだ来たばかりだからよくわからなくて…生活用品とかがさ…」
「あぁ、じゃあ今度案内するね」
桃花が微笑むと儚が頷く。
「あ、うん。よろしくね」
その和んだやり取りを見て悟が唖然とする。
「桃花ちゃんマジックが発動した」
「ああ、あの交渉術はネゴシエーターにもってこいだな」
優も納得する。どんなに相手が勇んでやって来てもいつの間にか桃花の術中に嵌ると言う、生徒会長の結衣ですら恐れる交渉術だ。
「じゃあ放課後にでも」
「あ、はい。じゃあ放課後に…」
ハタ、と入り口で足を止めて儚が振り返る。
「そうじゃないのよっ！」
面白い人だなぁ、と優と悟が儚を眺める。
「桃花！アンタ何をしてるの？」
仕切りなおしか、と優がうんざりする。あのまま立ち去ってくれれば平穏な朝に戻れるような気がしたが、それはないようだ。
「桃花ちゃんに言いくるめられたの無かった事にしてる」
悟が呟くと、儚が何かを振りかぶって投球すると悟の顎にそれが直撃して背中から倒れる。
「ハチは黙ってなさい！」

「っとらーいく…いや、デッドボールか」
優がしゃがんで悟の頬をぺちぺちと叩くが完全に気を失ってしまっている。
何やら桃花に向かって一方的に騒いでいる儚を横目に、悟が目を開くとふらりと立ち上がってフェンスを右手で掴んで遠い目をする。
「空はこんなに青い」
「おーい、人は空をとべねぇぞ？」
「とびませんから！？」
優の物言いに悟が抗議すると優はそれを受け流す。
「とりあえず桃ちゃん、これはどういう状況だか説明してくれないか？」
優が尋ねると桃花が妖艶に微笑んだ。今までの常に浮かべている微笑とは少し違う…笑み。
「私は優くんを殺しに来たの…。優くん、あなたは人類の敵だからね」
桃花が優の背後に瞬間的に回り込むと、優の襟を後ろから引っ掴んだ。そして優の身体が上に引っ張られると、簡単に両足が設置感を失った。少女の細腕が男一人を簡単に持ち上げる映像。行使者(ユーザー)ならば出来る、と悟は知っていながらも、やはりその異常な光景に反射神経を奪われた。
落下防止用のフェンスは三メートルはある。それを優が放物線を描くようにして外に放り出され、桃花が跳躍すると、一度フェンスの頂点に足をかけて、後を追うようにして飛び出していく。
法具(ディスク)…持ってきてない…。
悟は飛び降りるにしても、今は生身の人間で…。落ちたら死ぬ。
「！」
儚が自ら蹴り飛ばしたフェンスのない部分から飛び出そうとしているのを視界の隅に捕らえて、それに抱きついた。
「え？」
「うぉ！」

既に飛び出している儚に抱き着いたものだから、全力で抱きついてしまう。
「うおおおお！落ちる！死ぬ！」
「だったら飛びつくな！」
四階建ての校舎の屋上。儚は悟を振り落とす訳にも行かず、とりあえず滞空するとその手の位置を見て顔を真っ赤にする。
悟は掴みやすい部分を両手で思い切り掴んでいる。
「やわい…やわけぇ」
悟もようやく事態を理解して慌てるが手を離せない。
「Cの八十…七？」
「うっ！」
思わず口にすると、ごんっと後頭部が悟の顔面にぶつけられる。
「と…とりあえず掴まってなさい」
「はい。ご迷惑をおかけします」
悟が呟くと、二人がグランドに降り立つ。
「事故だから…」
悟が言い訳をしようとすると、儚が泣きそうな顔をしている。
「ごめんよ？」
「いいわよ…」
儚はふぅっと自らを落ち着かせるように大きく息を吐いた。
「あまり軽率な行動をしないで？人間は落ちたら死ぬわよ？」
「うん。でも俺もお前も人間じゃないか」
言われて儚がきょとんとする。
「変わった人間だね？あなた、本当の名前はなんていうの？」
「俺は悟だ」
すっと手を差し出すと、儚がその手を握るとグランドに向き直る。
「同じ人間として見てくれるのは嬉しいんだけどね…あれは果たして人間なのかしら？」
視線の先にいる桃花と優が、なぜか対峙している。
人間の目で追うにはぎりぎりの接近、そして離れてはまた接近。

ハンマーを互いに握って全力でそれを相手に叩きつけているような轟音が響く。
「俺にとっちゃ、友達で人間だよ。どっちも」
「ハチの癖に言う事は立派ね」
言われて悟は苦笑する。
「触ったこと許してくれるの？」
悟が尋ねると、二人がロケットのように空へ上がっていく。
「事故、なんでしょ？ほら、置いて行かれるわよ」
儚が悟の右手をぎゅっと握る。
「最後まで…私たちを人間と定義してくれそうなのは貴方だけかな？」
「ああ、最後まで…俺は人間で在り続けて、お前たちを人間として見続ける」
儚は嬉しそうに頷く。
「でもさ、人間は脆くて弱いよ」
「それは…誰も一緒だ」
悟が手を握り返すと、儚は空ろな瞳で空を見上げる。
「神と悪魔は人を見て嘲笑(わら)うのよ」
ぐんっと腕を引っ張られて、悟は久しぶりに恐怖を覚えた。
自分で法具(ディスク)を使って飛翔するわけではない。手を離されてしまえば、重力に逆らう術はなくなって、地面に叩きつけられる。本来の人の姿がそれだった。

朝からこんな場所に呼び出されるとは、今日は日が悪い。
優はそう思うと死刑囚のような顔をしている桃花、悟、儚と一緒に秋雨に呼び出された職員室で立っていた。秋雨も朝から怒らなければならないのか、とデスクをトントンと苛々した様子で指で叩いている。
「何をしていた？」

じろり、と睨まれて悟が一歩後ろに下がる。他の教師たちも何事かとこちらの様子を伺っている。
秋雨の姐御…不良たちも一目置く存在の教師でサバサバとした性格がウリの近所でも有名な女教師。その睨みは魔王だろうと萎縮させると言われるほど凄みがあった。
「ここじゃ話しづらいこともあるか」
秋雨はこの四人が特別であることを知っているが故に、周囲の教師もとい教官でもある人物の目に触れる場所では言い難いこともあるだろうと察する。
「見逃してくださいよ」
悟が呟くと秋雨は出席簿でぽこん、と悟の頭を軽く叩いた。
「本来、封殺制御（シールコントロール）してない上での教練（プラクティス）は認めていないんだ」
「あー、そうすっね」
出力だけなら特A級（エースクラス）の優と特A級（エースクラス）に認定（アナライズ）されている桃花がほぼ全力でぶつかり合っていたんだから、上からも下からも苦情が出ていることは容易に察することが出来る。
「着いて来い」
秋雨が四人に促すと、一階の職員室から教務室に移動する。秋雨は現代国語の教員で、それぞれの教科準備室というところにも教員たちは机を用意されている。
「入れ」
ドアを開けられて中に入ると、一人、大きな熊のような恰幅のいい二十代後半の男性教師がいるだけで、他には誰もいない。
学園、現国の教務室。学園最強の教官が集うという…生徒たちが最も恐れる魔窟。秋雨を始め、熊のような大男、大隈啓吾がこちらを見るとにやりと笑った。
「教師の待遇ってかなりいいですよね」
優が何の気なしに呟くと、秋雨が椅子に座って「ん？」と首を傾げる。
「ここは行使者（ユーザー）の特別教育施設も兼ねてるからね。それなりの行使

者の人材を一箇所に集めるんだ。その教師…教官だってそれなりに待遇が自然と良くなる。ちなみに、お前たちだって待遇がいいとは思うぞ。学費は鳳凰院が全部出すし、全寮制できちんと管理されたプログラムの上で教育課程が決められているんだ」
「金がなくても、親がいなくても、規律と言う不自由の中の自由にて、俺たちは教育を施されるんだな」
優の物言いに秋雨は苦笑する。
「とりあえずだ…緋村桃花、黒沢優、三森儚。通告一の減点が二。優は今すぐ身体検査を受けてもらおう」
「身体検査？」
悟がなんで？と首を捻る。
「身体検査って言えども、普通のじゃないさ。行使者（ユーザー）が受ける潜在（ポテン）能力（シャル）の測定を兼ねた精密検査を身体検査って言うんだ」
「はぁ」
優はいまいち理解できないが、取り合えず頷いておく。
「でもどうして？」
悟がいちいち口を挟んでくるが、秋雨はそれを邪険にせずに教育の一環としてなのか、しっかりと答える。
「神と悪魔は人を見て嘲笑（わら）うんだ」
優はその言葉を聞いて、流行ってるのかな？と桃花を見る。
桃花は腹部を右手で摩って、「うー」と何か悩んでいるようで、人の話は上の空のようだ。
「次いで、桃花、儚に通達」
「はい」
「ん？」
儚と桃花が呼ばれて秋雨を見ると、秋雨がいつも以上に険しい表情をした。
「優が魔術災害（マジックハザード）…魔術溶解現象（マギメルトダウン）を発露させる前兆を見せたら、殺せ」
ばん、とデスクを叩いて命令を下す。
本人の前で言うのか、それ。

優は何と無く、殺されるだの捕縛されるだのという言葉は聞きなれてしまって耐性が出来た。
桃花が一瞬、優を見て諮詢したが口を開く。
「本日、今朝未明、私は黒沢優の暗殺任務に失敗しました。適正があるとは思えません」
「正式な命令は履行されていない状況で、なぜその行動をとった」
秋雨はやはり、そういうことかと納得する。
「三森儚の学園赴任が黒沢優の暗殺であることは推測に容易く、その行動は私の職務権限と重複していたため、私も強硬姿勢を決定しました」
「なるほど」
秋雨は頷く。
「儚は優の暗殺を今朝決行するつもりだったのかい？」
「私は黒沢優を保護観察対象として当初、見ていましたが、緋村桃花との戦闘を見て確信しました。彼は人類の敵に成り得る。それほど強い行使者です」
優はその会話を適当に受け流していたが、悟は歯を食いしばって拳が真っ白になるまで握り締めていた。
「わけわかんなくね？」
悟が小さく、怒りを押しつぶすように呟く。
秋雨、桃花、儚が悟を見る。
「説明しろっつーか訳わかんねぇのは説明されても変わんねぇんだけどよ？」
がんっと壁を殴る悟に、秋雨の向かいに立っていた男性教師がガタンと椅子を鳴らして立ち上がる。それを秋雨が左手を上げて制する。
「優の持つ行使容量（ランキャパシティ）の問題だ。こいつは一人でも戦争を続けられるほどの…悪質なほどの能力を保有している。それが何かの陰謀に使用される前に消すのも妥当な判断だ」
「そいつはすげぇな。数の暴力か」

優一人を殺せば、他の大多数が危険に晒される事はない。そういう意味合いでの暗殺命令。
「それでも俺は優を殺すのは反対だ。他の沢山の人間のために死ねって言うのは間違ってる」
「まともな事を言ってるとは思うよ」
秋雨が見下したように言うと、悟は事もあろうか秋雨に掴みかかる。秋雨は座ったまま、悟を物凄い形相で睨み付けると、悟は見えない壁に当たったかのように弾き飛ばされて、背中から壁に激突して、そのまま壁にもたれかかって尻を床に着いた。桃花と儚は壁を展開して防御、優は平然と立ったまま…。これが力量の差でもあった。現実的で圧倒的な、人間とその他の境界線。
「行使者(ユーザー)じゃないお前が一番理解しているはずだと思ったんだけどな」
「何…しやがる！」
悟は立ち上がるが掴みかかろうとはしなかった。同じ事をしても同じように吹き飛ばされるだけだと直感でわかった。それは無意味な行為。
「あんたもタフな奴だね。見ろ、桃花、儚ですら一歩後ろに下げる程度の力を行使(ラン)した」
体重の差もあるだろうが、桃花と儚はそれでも軽く押し込められたが、優は何もしていないのにその場に、まるでそよ風を当てられたかのように平然としている。
「こいつはそういう存在だ。管理しきれない行使者(ユーザー)なんだ。一定の教育を施して従順にさせるか、元からいなかったものとして抹消するか、人間は身勝手で傲慢だ。そして自分たちは手を下さず私たちにそれをやらせる」
「優だって人間じゃねぇかよ」
悟が喚く。
「わかんない奴だね…。私らは人間なんてそれこそ、一秒に満たない時間で何十人と殺せるんだ。そんな私たちをお前は人間と呼ぶの

か？」
「ぐ…」
悟が口を開こうとして…言葉にならなかった。
「人間でいられるってことは幸せなのかもなぁ」
まるで人事のように優が呟く。
「あぁ…優。お前は昔から普通と違うことができたっけなぁ」
何と無く、ずい分と昔のことを思い出して悟が呟く。
「そうだな」
悟と優がにやり、と笑う。
言葉は要らない。
分かり合える部分があった。
暗殺命令だろうと何だろうと、昔から優と悟は二人で何かをこなしてきた。だからこそ、分かり合えた。
暗殺命令だろうと何だろうと、全て返り討ちにする。
優の声が聞こえた気がした。
「どうあれ、優の固有行使術式（パーソナルプログラム）の危険度はかなり高いものであることが推測されている。桃花の天使旋律（エンジェリックコード）と同じかそれ以上だな」
ふと、秋雨は黙り込んでいる桃花の様子の異変に気付いて首を傾げる。
「桃花？あんたどうしたんだい？」
尋ねられても桃花は俯いたまま、顔を伏せて上げようとはしない。
「私にはわからないんです。この世界はホンモノなの？ニセモノなの？」
秋雨はため息を吐いた。思考の仕方がいまいちわからない桃花に付き合っていられるほど、自分はヒマでもない。
「そのよくわからん台詞で任務を放棄する事は許さん」
秋雨はデスクの一番上の引き出しを引っ張り、中から青い紙を二枚取り出す。
「黒沢優の暗殺…正式命令書類だ」
儚がそれを受け取って、一枚を桃花に渡す。

青紙（ブルーペーパー）…最重要任務の記された絶対力の強い命令書。
桃花は突き出された紙を呆然と焦点の合ってない瞳で見下ろして、受け取ろうとはしなかった。
「桃花、私たちはこれを受諾しないと殺されるよ」
「え？どうやって？」
桃花が満面の笑みで儚に尋ねる。
「誰が？どうやって私を殺せるの？ねぇ、どうやってかなぁ」
純真無垢な子供のように、桃花が首を傾げる。
「殺せるってことは…私も殺しちゃっていいのかなぁ」
「桃花、その先を言うな」
秋雨が桃花を制止すると、桃花は「残念」と呟いて儚から紙を受け取って無造作にスカートのポケットにそれを突っ込んだ。
「取り合えず、受け取っておきます」
執行するかどうかは別問題、と言わんばかりに桃花がくるりと背を向ける。
「ね、優くん。いこっか」
ぐい、と手を引っ張られて優が教務室から連れ出されていく。
「くそったれ」
悟が呟くと、秋雨は左肘をデスクに立てて手に顎を乗せる。
「何がそんなに気に入らないんだ？」
苛々している悟に尋ねると、悟は「別に」と答える。
気に入らないのは全部だった。そう、全てだった。
儚は任務だからと割り切っている節があるし、秋雨は立場上。桃花に至っては正式にその命令を拒否しているのに、どうしてそれが行われるのか。
それが納得できなかった。儚は今日出会ったばかりだが、暗殺決行なら今朝も行えたはずだ。それなのにそれをしないとなれば、やはり心の何処かでは、やり難いと感じているのではないだろうか？
「なぁ…みんな決まり事とか、そういうのに縛られてそれって正しいのか？」

「正しいとは思わないよ。また間違っているとも思わない。それは全部、そのときの状況に寄り蹴りさ」
秋雨が「だろ？」と儚に尋ねると儚も頷いた。
「人が人を裁くように、行使者（ユーザー）も行使者（ユーザー）を裁くの。それが法則（ルール）。人は人の作った法律の上で自由を得て、私たちは人と行使者（ユーザー）の作った法の上で自由を獲得するのよ」
儚に聞かされて悟はなるほど、と感心する。
「人より多くのことが出来て、人よりすごいのに、優は殺さるかもしれないんだな」
「それはだな…」
珍しく秋雨が言葉を選んだ。儚が「それはね」と間に入る。
「人間の中にもいるでしょ？人よりすごいことが出来るから、嫌われちゃう人」
「え？ああ」
確かに嫉妬されてしまう人も確かにいるだろう。それは確かに存在する。
「えとね…それと同じだと思うの」
「でもそれが全部じゃ…」
言いかけて悟は気付いた。
一部の行使者（ユーザー）がその全く逆の思考を持ち始めたらどうなるのだろうか？
選民思考。
それを持って人間を見下してしまったら、大惨事になりかねない。
今回の場合は優だ。優ならば大丈夫だろうという保障はどこにもない。
優を知っている自分だからこそ、まだ心情的に信じられるが、全く知らない人間ならどうだ？彼は信じるに値する人間なのか？
「バカではなくて安心した」
秋雨はまるで悟の心の中を覗いたかのように嬉しそうに笑んだ。
それを受けて悟は嫌そうな顔をする。

「まぁ、人間ってのも色々いるわな」
向かいの席の大男が口を開く。現代国語の教員というよりは体育の教員のほうが向いている気がしなくもないが、大熊と呼ばれている大隈啓吾が口を挟んでくる。
「とっつぁんも行使者（ユーザー）なの？」
悟が啓吾に尋ねると、啓吾は首を横に振る。ぶんぶんという擬音が似合うような大きなアクションだ。
「俺は違うぜ。俺は人間の部類に入るな。まぁ、そこの京とは昔からワケアリなんだよ」
「ほほう」
悟がニヤリと笑うと秋雨がため息を吐く。京とは秋雨のことで、秋雨の本名は秋雨京だ。
「悟、お前は何をそんなに期待してるんだか…。期待、と言えば私はお前に期待してるぞ」
「へ？」
悟は正直に言われて唖然とする。そんなことを教師に言われるほど、成績がいい訳でも素行がいいわけでもない。
「まぁいい。出てお行き」
しっしっと追い払われて、悟はしぶしぶと教員室を出て行く。
儚と秋雨が向かい合う。
「お前には迷惑をかけるね」
「いえ。昔からそういうことには慣れてますから」
儚が苦笑すると、秋雨は「慣れるっていうのかね」と呟く。
ふと思う。
労いの言葉など不要だった。その程度で安らぐ精神ならば当の昔に朽ち果てていただろう。
「黒沢優…対象はとてもいい友達を持っていますね」
「ん？あぁ、悟のことか」
秋雨はそうさね、と頷く。
自分とは関係ない、ただの友達が殺されるかもしれない、と言う

ときに、悟は本気で怒った。そういうことができる友人を持つことは掛替えのないことなのだろう。
そして…少し羨ましい。
「緋村桃花の暗殺命令を受諾します。状況次第では両名を…」
秋雨は何も言わなかった。
桃花の言動の変化に少しばかり気になっていたが、先ほどの桃花の危険思想は度外視できない状況にまでなっている。それは許されてはいけない。
「あんたも嫌なら…」
止めていいんだよ？
口にはしない。そうすれば儚の存在理由が失われてしまう。
「いえ…私は世界の秩序を行使しますよ」
儚はそう言って教務室から出て行く。
「京」
不安げな表情を隠さずに啓吾が心配そうにこちらを見ている。
「何だい？」
心配性なのは昔から変わらない啓吾に尋ね返すと、啓吾は大雑把な身体の造りに反して繊細な顔をする。
「わかってるよ。あの子達は何だかんだ言っても子供なんだ。大人は守ってやらなきゃならん」
「止めてやれないのか？儚も桃花も」
止める…か。
それをするにはもう遅すぎる気がする。
桃花も儚も高く舞い上がってしまった鳥のようなものだ。
そこで羽ばたくのを止めろといえば、あとは落ちて死ぬだけだろう。
「私ももう少し気楽な部署で気楽に考えていられればよかったんだけどねぇ」
思わず愚痴が出ると啓吾が豪快に笑った。
「そういうわけにもいかんな。魔法省内務庁暗殺部隊統括長さんな

んだかよ」
「無駄に長い看板を背負わされてるだけさね」
秋雨は電話を取ると、相手が出るのを待った。
「私だ…」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0627h/

神と悪魔は人を見て嘲笑う

2010年10月17日18時00分発行